

マサラタウンのきののみ
屋さん（次話執筆中▷
▶ ?▷ ▶ ?）

ソーマ=サン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

【お知らせ】

長らくお待ちせしましたが、現在、次話執筆中で候。

久しぶりに書くので時間がかかりそうですが、お待ちいただければ！（2021/03/15）

4月異動により業務量がめちやくちや増えたので、普通に執筆時間を取れなくなり申しました。2、3年単位で書けない可能性が出てきたのでとりあえず報告をば。土日は丸一日寝てるので。（2021/04/13）

【あらすじ】

マサラタウンで平々凡々と過ごすきのみ屋さん。

レッド(最年少チャンプ)、ブルー(カリスマモデル)、グリーン(最年少ジムリーダー)、イエロー(ピカ厨)の幼馴染である彼は、ある日『赤くてデカくてムキムキのポケモン』を拾ったのをきっかけに日記を書き始めた模様。

【留意事項】

※ 初代ポケモン殿堂入り後のイメージでありながら、メガシンカやダイマックス等が認知されている世界線です。

※ また、ポケモン以外にも一般的な生物が一部生息しているほか、自然界は弱肉強食の生態系のため、残酷描写が含まれる可能性があります。

↓ 「アンチ・ヘイト」タグを念の為追加しました(2020/09/21)。

※ それとは別に、1話の前書きは一応読んでおいてください。

※ 更新できる時は、0時か12時に投稿。

日記形式は1回/2-3日、三人称視点は1回/週を目標。

目次

日記：赤くてデカくてムキムキ	1	マサラタウン：テレパシー	59
マサラタウン：幼馴染	7	マサラタウン：行き先	64
日記：赤くて堅くて重い	12	マサラタウン：大橋	70
日記：黄色く速くて強い	20	マサラタウン：祖父	76
日記：喜劇劇的悲劇的	27	マサラタウン：ラバーバンド（工事完了）	2
日記：平穩不穩	31	020/06/30	81
日記：しばき倒すぞ	36	マサラタウン：キメラ	94
マサラタウン：きのみカレーの日	40	$\alpha? \theta? \rho$ $\pi \alpha \rho? \delta \varepsilon \iota \sigma \circ \square$:と	
マサラタウン：農場長ケーシー	44	ある報告書	102
マサラタウン：V S チャンピオン	49	マサラタウン：分岐点	108
		マサラタウン：りゅうせいぐん	116
		日記：お見舞い	124
		日記：ポケモンのちからつてすげー！	

日記：赤くてデカくてムキムキ

○月?日

今日から日記を書くことにする。

理由は特にない。が、敢えて挙げるなら、『変わったポケモンを拾ったから』だろうか。そのポケモンは二足歩行を覚えた蚊のような姿で、俺のひと周りふた周りは大きい200と数十cm。体色は赤く、やけに筋肉質。

気を失った状態で、家の裏をケーシイのねんりきによって運ばれているところに出会でくわした。

どこで拾ってきたのか、とケーシイに訊ねてみても、テレパシーで要領を得ないイメージが送られてくるのみ。結局小首を傾げてその話は終わり、とりあえず木陰で休ませて様子を見ることにした。

見た目からして暑苦しいが、『ほのお』という感じはしなかった。見たまんま『むし』。あと体躯に不釣り合いな羽が生えていたから『ひこう』? あるいはムキムキの筋肉達磨具合から『かくとう』の線も有り得そうではある。

明日オーキドのおっちゃんに聞いてみようと思う。

○月○日

一夜明けてオーキドのおっちゃんに聞いてみた。

返事は『分からない』。世界的なポケモンの権威であるオーキドのおっちゃんでも、まだ見ぬポケモンはいるらしい。おっちゃんは『これじゃからポケモンは奥深いんじゃない』と楽しそうに笑っていた。衰え知らずの探究心。学者肌ここに極まれり、だな。

そんなこんなでおっちゃんの方でいろいろと調べてくれるらしく、『餅は餅屋』ということでも俺も俺で普段の生活に戻ることに。

ちなみに、あの筋肉達磨は疲れているのか、今日も一日木陰で眠っていた。ケーシーのねんりきによって運んだままの体勢から全く動いてないように見えた。力尽きているのかと心配したが、しっかりと胸筋(?)が上下していたので問題はないだろう。

念の為、ケーシーに納屋に運んでもらって、風邪を引かないように敷き藁に押し込んでおいた。到底風邪を引くとは思えないが、まだ夜間は肌寒いからな。

○月△日

久方ぶりに山籠りからレッドが帰ってきていた。

相変わらず根性論的な特訓をしているからか、生傷が絶えないらしい。見兼ねたグリーン姉ちゃんから傷の手当をされていた。

擦りむいた頬に絆創膏を貼ってもらっているところなんかは昔と変わらない。歴代最年少チャンピオンになったと言っても、グリーン姉ちゃんにとっては『手のかかるもう1人の弟』という感じに変わりはなさそうだ。

そのレッドから、納屋できのみジューズを飲む際に『また変なポケモン拾ったな』なんて、敷き藁に埋もれて眠る赤い筋肉達磨を見て言われた。

前科があるだけにぐうの音も出なかつた。が、『変な』呼ばわりされたからか、うちの長髪のデンリユウからは電気を流され、ベロベルトには舌で舐められ、ヨクバリスにはゲップを嗅がされ、悶絶していた。

特に最後のヨクバリスからの仕打ちは悲惨だった。あいつは名前に恥じず、業突く張りでも何でも口にする。しっかり歯を磨いてやらないと口臭がやばいのに加え、如何にして高威力のゲップを出すかにこだわっているため、その馨かぐわしさたるや否や。ゲップされた瞬間には思わず顔を背け、レッドの無事を祈った程だ。

ただ、下手をしなくとも人が死にかけるレベルのそれを受けて悶絶する程度で済むあたり、レッドの野生児具合は相変わらず。イエローといい、幼馴染たちが本当に同じ人間なのか疑わしいものだ。

ちなみに今日も今日とて筋肉達磨は眠っていた。

○月□日

朝起きて裏庭に行けば、筋肉達磨も起き上がっていた。何故、キレツキレのポーズなごゆえグをキメていたのかは分からないが。

ともかく、筋肉達磨は元気になったようで、俺と目が合うと見せ付けるようにポージングの向きをこちらに変えてきた。

褒めて欲しいのだろうか、と手を叩いてやると、全身の筋肉が膨張し、更にそのキレが増していた。俺の反応としては合っていたようである。

さて、このヘンテコポケモンは野生に還る様子もないし、ちょうど肉体改造に精通していそうな見た目であるため、近頃だらしない腹周りになっているヨクバリスのダイエツト講師としてウチに置いておくことにした。

トレーニングは早速今日から。家の東側の木の実畑で、せっせと今朝収穫した木の實の種類ごとに瓶に分け、土に埋めて保存しているヨクバリスに声を掛け、共に筋肉達磨の元に。その段階では何かいい事があると思っただのか、ヨクバリスはルンルンと軽い足取りで俺についてきていたことをここに記しておく。

併せて、意思疎通をスムーズに行うための要員として、洗濯物を干し終わったケー

シイも呼んで、ブーツキャンプと相成った。何故か、俺とケーシイも一緒にトレーニングする羽目になったが。

とはいえ、この筋肉達磨——いや、『きんにくん』と命名しよう、たぶんオスだし。で、きんにくんだが、その指導者としての能力は相当に高いらしく、俺とケーシイとヨクバリスで、それぞれに合わせたトレーニングメニューをもの数分で組み立てて行うこととなった。すっかり目標の体型に合わせた運動量で、しかも丁寧な指導付き。

実は中に入っているのでは、と思うぐらいには驚いた。

俺とケーシイは仕事があるからずっとトレーニングという訳には行かず、途中で抜けたのだが、ヨクバリスはみっちり扱かれたようである。

ちよくちよく様子を見に行っていたケーシイに聞いたところ、適度に休憩しながらしており、レッドのように気合いでどうの、というような類ではなかったらしい。

だが、普段きのみとゲツプの研究しかしてこなかったヨクバリスにとっては、なかなかハードだったらしく、食事時には生気のない眼差しで地面を這って納屋にやって来ていた。明日はゆっくり休むといい。

ちなみに、きんにくんの食事は、出荷できなかつた規格外品のきのみジュースのみ。それだけで足りるのかと、話を聞いたところ（ケーシイのテレパシーを介した意思疎通）、別次元の世界から主要なエネルギーは得ているらしい。

別の世界があることは、そういうポケモンがいるらしいことから知っているが、個体数が少なく、それもまさか自宅で遭遇することになるとは、全く想定していなかったから、何とも反応ができなかった。

何にせよ、ヨクバリスの専属トレーナーであることに変わりはないし、気の赴くままにウチにいるといい。

マサラタウン：幼馴染

ジョウト・カントー地方において『最年少チャンピオン達成』という輝かしい記録を樹立したマサラタウンのレッドには、彼に負けず劣らずの経歴を持つ4人の幼馴染たちがいた。

1人は、レッドと並び、カントー地方に住む者なら知らぬ者はいないと謳われる、トキワシテイのジムリーダー——グリーン。

嘗てレッドと共にチャンピオンを目指して実力を高め合い、その座をかけて闘い夢破れた青年である。

しかし現在、その類稀なる才能を發揮し、若くしてジムリーダーを務める傑物でもある。

一介のジムリーダーながらも、四天王と五分以上に渡り合う能力を持ち合わせており、リーグから幾度となく四天王の後継として打診を受けている。が、彼自身はチャンピオンになるという夢を抱き^{いだ}続けており、四天王の誘いは断り^い続けている。何れ^いレッドを打倒し得る力をつけた暁には、リーグに再挑戦する心積りであるから、万に一つも四

天王に納まる気はないのだろう。

そして一人は、世界を飛び回り、トップモデルとして活躍するブルー。

彼女に授与された賞は数知れず。スイクンに跨る姿は『女神』と称され、うら若き少女たちのハートを射尽くし、針の筵として早数年。

ジョウト地方の伝説ポケモンとされるスイクンを初め、アローラキュウゴン、ガラルギヤロップ、サーナイト等々、見目麗しいポケモンに囲まれる様は何者にも侵し難い神聖さを放っており、彼女を表紙とした雑誌は一日と経たずに店頭から売り切れると言
う。

至極の高嶺の花。それがブルーという女性である。

そして一人は、ポケモン大好きクラブ世界本部名誉会長、兼、ピカチュウ部門本部総括——イエロー。

彼女を表す言葉はたった一つ。

『ピカ厨』。

それを聞くだけで知っている者はそつと目を逸らし、もつと知っている者はその場で頹れる。

ピカチュウを愛し過ぎるがあまり、ポケモン大好きクラブ会長の目に留まり、トントン拍子に大役に就いたマサラタウンきつての問題児である。と同時に、彼女はマサラタ

ウンキつての麒麟児でもある。

公式試合の手持ちポケモン数は、最高6体。その6体全てをピカチュウで揃え、それでありながら各地のジムバッジを掻っ攫い、ついでとばかりに各地のチャンピオンリーグにふらりと立ち寄る、タイプ相性に正面からぶん殴りにいくヤバい奴。

斯く言うレッドやグリーンも、彼女に辛酸を舐めさせられた辛い涙の滲むような過去がある。

そして最後に。

『直営販売 通信販売 青果に加工に苗木も可

何でもござれのきのみ屋さん

貴方のポケモンに最高の1粒 貴方のためにも最高の1粒を

マサラタウンのヨクバリ印 創業8年 クリア農園』

10代にして起業し、きのみ農家を始めた行動力の化身——クリア。

幼馴染5人の中で唯一ポケモンにそれほど興味を示さなかったこのクリアという青年は、何を血迷ったか、祖父から相続した広大な山林を開拓し、ポケモンの手を借りつつも1人で樹園地に整備したという逸話を持つ強者である。

彼のポケモンには、今一華やかさというものがない。

ヨクバリス、ダグトリオ、ケーシイ、エテボース、デンリュウ、ピーダル、ミネズミ、

ローブシン、オーロット、ドリユウズ、ベロベルト等々、凡そ土地改良ときのみ管理を主にするようなポケモンたちであるが、ポケモンブリーダーでもない限り、一人がこれ程に多種多様なポケモンを管理することは殆どない。

それもそのはず、1番ネックとなるのは金銭面であろう。水と酸素と日光さえあれば最低限生きていける草ポケモンや一部のポケモンを除き、一般的に栄養を摂るために食事をすることは欠かせない。ポケモンの体躯が大きくなれば、その分消費する食料も多くなり、必然、食費が大きく膨れ上がる。

個人で多頭飼いとすることは、そう言った面を解決しなければ決して実現し得ないことなのだ。ブリーダーのように、金銭を受け取り育てているのとは訳が違う。それも、ブリーダー自身のポケモンも、その数自体は片手で数えられる程度であるのだが。

その事実を踏まえ、クリアの事業は上手くいっている。業績は年々右肩上がり。地方スーパーのみならず、タマムシデパート等の老舗店とも取引を行うようになり、何より他企業と異なっているのが、輝かしい経歴を持つ幼馴染を広告塔に据えていることである。4人それぞれが世間に少なくない影響力を持っており、どの企業も喉から手が出る程に欲している人材。その4人全てを、という大盤振る舞いは、もし他社が真似しようとしても莫大な広告費がかかるとして断念することだろう。

幼馴染たちとの契約は、特別、安い金額ではない。客観的な事実として、他社と比べ

ると安くはあるが、それも『幼馴染価格』と揶揄される程でもない。これまでの積み重ねがあったからこそその価格設定であった。

チャンピオンを目指して各地を旅していたレッドとグリーンの2人には、日々のコンディションの調整とポケモンとの円滑な意思疎通を図るため、それぞれの手持ちポケモンの趣向に合わせた多種多様なきのみの仕送りを。各地のポケモンコンテストに挑んでいたブルーには、毛並みや鳴き声などの評価を高めるような厳選したきのみの配送を。トキワの森に入り浸っていたイエローには、ピカチュウと仲を取り持つであろう飛び切り酸っぱいきのみの選別を。各人の目的にあつたきのみを、彼此10年以上——事業を開始する以前から、マサラタウンの共同農園で栽培しては送り出していた。

クリア人としては、幼馴染たちを応援するだけで、巡り巡って良い思いを、というような計算は到底考えていなかったのだが、利用できるものは利用してしまえという合理的な判断から現在の形に納まったようである。

斯くして、次代を担う若者たちの活動は、マツシブーンを拾ったことで書き始めたクリアの日記によって、今後綴られていくこととなるだろう。

日記：赤くて堅くて重い

○月×日

レッドからきんにくんの力試しをさせろとのお達しがあった。

朝一に収穫は終えていたし、選別や梱包はポケモンに任せて問題ない。きんにくも否やはなかったようで、ケーシイのレポートでレッドの元へ送って貰った。

レッドとの対戦に連れてきたのは、きんにく以外だと移動のためのケーシイのみ。そして戦闘に参加するのはきんにくのみ。

きんにくんの力試しをご所望と言うから、他のポケモンは一切連れてこなかった。だからレッドから『なんで他に連れてきてねえんだよ』と文句を垂れられても素知らぬ振り。

大型ポケモンを相手に、ウチの大事なポケモン従業員に怪我でもされたら敵かなわないからな。

その点、きんにくはヨクバリスの肉体改造トレーナーというだけで、現状では多少の怪我しても業務に差し障りない。

俺としてもきんにくんの能力を確認する必要があったし、レッドからの対戦の申し出

は、ある意味渡りに船であった。力仕事を任せても大丈夫な様子であるなら、きんにく人には是非とも改植時に力を発揮してもらいたいものである。

で、対戦はマサラタウンにある広場。オーキド研究所の正面にある空き地で行った。

近隣住民や研究所から息抜きとばかりに研究員がやって来ていた。オーキドのおっちゃんも興味津々な様子でビデオカメラを片手に観客と化し、おっちゃん以外にもレッドの対戦する勇姿を収めんとスマホで撮影している若者が何人かいた。

レッドはマサラタウンにちよくちよく帰って来るため、町の少年少女にとつて馴染みやすい存在ではあるが、それでも憧れが一定以上はあるようで、こうして対戦をすると一気に人が集まってくる。

レッドの手持ちは、カビゴン、リザードン、ラプラスなど大型のポケモンばかり。俺がきんにくくん一体だけであったことから、その中からリザードンを選択して、今回の対戦と相成った。

久方振りの対戦ではあるが、特に指示は出さず、好きなようにやらせてみた――

◇ (三人称視点) ◇

時は、クリアが日記書いた日の昼に遡る。

その日、オーキド研究所前の空き地には、向かい合う2体のポケモンの姿があった。

1体は、カントー・ジョウト地方リーグチャンピオン――レッドの相棒リザードン。

1 体は、観客に自らの肉体美を見せ付けるようにポージングをキメる未知のポケモン。

肥大化した蚊をモチーフとしたような外観で、圧倒的な存在感の胸筋に2本の腕、そして4本の脚。長い口吻こうぶんはダイヤモンド以上の硬度を誇り、その驚異的な肉体から放たれる鉄拳は、分厚い金属板でさえ容易くぶち破るのではないかと想起させる。

ポケモンを体系化し、ポケモン研究の第一人者と呼び声高いオーキドが、各地の研究仲間に呼び掛けて尚、詳細が掴めないポケモンだった。

その未知を既知としているのが、エーテル財団。表向きはアローラ地方のポケモン保護組織であるが、その実、今回リザードンと対峙しているポケモンについて様々な情報を持ち合わせている極秘研究機関。

マサラタウンに出現した筋肉質なそれは、ウルトラビーストウルトラビースト UBと呼ばれていた。財団では、UBO 2 EXPANSIONエクスパンション——マッシュブーンと呼称され、ウルトラスペースというUBのみが生息する異空間の存在だった。

それがどういう訳か、マサラタウンの一農園主——クリアの元へ行き着いた。

そして何故か彼に懐き、今こうして空き地の周囲を囲む人垣に向け、精一杯に己の肉体をアピールしていた。

「??クリアに似て変なやつだな。まあいい、小手調べからだ。リザードン、エアスラッ

「シュー！」

威嚇するように口端から火花を散らしたりザードンが、主の命に従い大きく羽撃く。空間が揺らぐような気配を見せて土埃が舞う。1つ、2つ、3つと、1度の羽撃きで発生した不可視の刃が、筋肉質な肉体を目掛けて蹂躪せんと迫っていた。

対するクリアは「きんにくん、好きなようにやれ」と指示にもならない言葉を飛ばすのみ。

マツシブーンがどういった技を使うのかすら知らず、成り行きでトレーナー役を担うに過ぎない彼の心境は、どちらかと言えば観客に近かった。

きんにくんがどんな対処をするのか、どんな攻撃をするのか、はたまたどういう守りをするのか。

彼の傍らで浮かぶケーシーとテレパシーで遣り取りしながら、ああでもないこうでもないで静観に徹していた。

だから彼にとってそれは意外で、レッドや観客にとつても度肝を抜かれるものだった。

両腕を上げ、観客に上腕二頭筋を誇示するフロントダブルバイセップスの体勢から、滑らかに腕を下げ、腰に手を当て広背筋を張るフロントラットスプレッド——からの、背筋を伸ばすように身体を逸らした胸筋のポンプアップ。

不可視の刃到達の瞬間に膨張した胸筋に、エアスラッシュが激しい破裂音と共に霧散した。

「おお、すげえ」

呑気そうなクリアを他所に、レッドは更なる指示を出す。

「リザードン、呑まれるな！ だいもんじだ！」

意味の分からない対応を取られ、苦虫を噛み潰したように顔を歪めるレッドは、自身への一喝も兼ねてリザードンに注意を飛ばした。無論、チャンピオンとして幾度となくその座を防衛してきたレッド・リザードンコンビが、この程度で隙を見せる無様を晒すことはない。けれども、衝撃的だったこと、埒外の対応であったことは純然たる事実だ。喉奥から迫り上がる火炎が一息の元に放たれる。轟々と音を立てて大地を焦がす炎が、瞬く間にマツシブーンに激突した。

然しものマツシブーンもリザードンの十八番を前にただでは済むまい。——そうした慢心もなく、滑空して距離を詰めたリザードンは、鋭い爪を大きく振り被った。

「ッ!？」

大火の中で揺らめく影。

何かに引つ張られるように渦巻いて後方に流れる橙が、次の瞬間、大気の壁を打ち砕いて弩いしゆみの如く放たれた。

捲れ上がるのは、マツシブーンを覆っていた饒猛な火焰。腕先から順々に、火の衣を破き剥がすように散り散りになる。

その赤熱した体躯は、だいもんじ故か。あるいは、心音が聴こえる程の脈動故か。

暴風を纏うばくれつパンチが、リザードンのドラゴンクローと搗ち合った。

それは宛ら、鋼鉄を打ち合わせるが如く。

見る者の肌を泡立たせる轟音が鳴り響く。

山彦のように町を囲む山々を反響し、海に面した南方の浜辺で、寄せる波を塞ぎ止めるように砂浜の上で海水が不自然に一筋に並んでいた。

そして一拍の後、思い出したかのように波が砂を攫って海に還る。

「うわっ?!?!」

静寂を破ったのはレッドだった。

空中という踏ん張りの効かないところに居たりザードンは、あまりの衝撃にゴロゴロとレッドを巻き込んで転がっていた。

リザードンは目を回し、そしてレッドはその下敷きに、といった具合である。

「くう?!起きろお、リザードン、重いいつ」

一般的に、リザードンの体重は90kg前後。レッドのリザードンにおいては、山籠り等々の成果もあり、優に大台に乗っている。片腕共々挟まれた状態からでは、抜け出

すのは至難の業であった。

そうして慌てた観客総出でレッドの救出を図る一方、

「あー、こいつ気を失ってんな。だいまんじにノーガードとか、バカでもやらねえと思うんだがなあ?！」

ばくれつパンチを最後に気絶したマツシブーンを、クリアは拾った木の枝でつんつんと突いていた。

どこか満足気な表情で倒れ伏すマツシブーンに、取り立てて言う程の外傷はない。精々が軽度の火傷程度。念の為ポケモンセンターに連れて行った方が無難であろうが、恐らくやけどなおしの処方箋を出されて終わると読んでいた。

「さて、と。これでレッドも満足したと思うし、俺は先に帰らせてもらおうかな」

そう判断して、クリア一行は忽然と姿を消した。

ケーシイのねんりきによりマツシブーンを背後にしたその威風は強者を思わせ、ノーモーションのテレポートによりラスボスムーブをかましたクリアは、後日、動画投稿サイト——Poke Tubeに投稿されたこの日の動画によつて、知名度爆上がりのお目を見ることがとなった。——というのは、また別の話。

◇ (クリアの日記) ◇

——と、なんやかんやで、レッドも満足したみたいだし、俺もきんにくんの実力の一

端を知れたし、でなかなか有意義な時間だった。

対戦の後はきんにくんにやけどなおしを塗って安静に努めるように言いくるめて普段の農作業に戻った。

今日はレッドとの対戦以外、特にイベントもなく、いつも通りの1日だった。

日記：黄色く速くて強い

○月■日

きんにくんが火傷のため、トレーニングが休みの今日、『チートデイ』と称して、ヨクバリスはきのみのお漬物を頬袋に溜め込んで恍惚としていた。程よく発酵したそれは、人を選ぶ癖のある味をしているが、ヨクバリスにとってはほろ酔い気分にかけてくれる、ちょうど良い嗜好品らしい。ピカチュウの仕事振りを眺めながら、木陰でダラしく休憩していた。そしてそのまま寝入ってしまった、——詰まるところ、今日の仕事をサボり倒した訳である。

正直、まだ仕事が残っている最中さなかに、1人大役を成し遂げたと言わんばかりに顔を赤らめ出来上がっていると見るとは少々苛ついたが、ピカチュウに指示を出すのに忙しくてそれどころではなかった。後々きんにくんに絞って貰うから覚悟しておけ、と念を送っておいた。

それはさておき、収穫が忙しいこの時期になると、週に数度、俺の農園にはトキワの

森のピカチュウ一族が収穫の手伝いにやってくる。

彼等へのお駄賃は規格外のきのみである。

ただ、『規格外』といっても、サイズと糖度（ものによつては辛味や酸味）の数値から『秀』『優』『良』に分け、その等級分けから漏れたものであるから、味以外に問題がある訳ではない。それに森に自生しているものと比べると、肥料や剪定、摘果等の管理をしている分、ウチの方が味も大きさも優れており、ピカチュウとしてもリスクなく食料が手に入るといふ彼等側のメリットもある。

こちらとしても、作業負担の軽減は勿論、どうしても出てしまうロスを限りなくゼロに——無駄なく消費できるメリットがある。

所謂、win-winの関係。選定漏れのきのみを近所にお裾分けするにしても、到底その程度で処理し切れる量ではなく、産業廃棄物としてゴミの収集に出すにしても処理費が馬鹿にならない。当然、山林への違法投棄は処罰の対象だ。

そんな中で、ピカチュウたちの手伝いの対価として、そうしたきのみを渡せる今の関係は、願ったり叶ったり。この関係が構築される以前と比べると——お互いに作業環境・住環境の違いはあるもの——大幅に環境が改善されたため、今ではなくてはならない存在と言つても過言ではない。非常に有難い存在であり、今後とも末永くお付き合いしたいと考えている。

また、きのみを渡すと毎度のこと披露してくれる感謝の舞には思わず頬が緩む。イエローがいれば発狂するであろうことは想像に難くない。

それに、長老ピカチュウたちにとっては、ヨクバリスの密造酒が堪らないらしく、今日も収穫の手伝いをピチューや若い衆に任せ、長老衆は昼間から酒を煽っていた。

ピチューたちには『あんなダメな大人になるなよ』と注意しておいた。

○月○日

ピカチュウにとって、マサラタウンはある種の夢を叶える町である。

それは、この町で生まれ育ち、旅立ち、ポケモン大好きクラブという彼女にとっての揺籃ゆりかごに意気揚々と飛び込んだイエローに起因する。

このイエロー、大のピカチュウ好きである。他のどのポケモンよりもピカチュウを愛し、そして愛されたいと思っている。超が付く程のピカチュウ好きである。

故に、手持ちポケモンは全てピカチュウであり、森の外に想いを馳せる若きピカチュウたちにとって、イエローに見初められることが、夢の第一歩。

だからこそ、トキワの森のピカチュウは力を求める。元々は野性的で本能的な狩りを生業としていたはずなのだが、今では見る影もない。??もちろん、皮肉だが。

それもこれも、全てはイエローが生まれてから、ピカチュウたちの人生ならぬポケ生

を狂わせた、と俺は思っている。

それを裏付けるのが、この時期のピカチュウたちの行動だ。

マサラタウンは、町の南方を除き、周囲を森で囲まれている。だから収穫時期になると、甘い匂いに釣られた無数のむしポケモンたちが、出るわ出るわと、目を塞ぎたくなくなる程に湧いてくる。いや、本当に。下手をすれば山越えを疑う程に。

そんなむしポケモンを追い払うのは、普段であれば長髪のデンリユウ、夜間はゼルネアスやオーロツトなど。

日中は圃場で作業をするため、作業員の気配から侵入を忌避し、デンリユウ一匹でも対応として事足りる。ポケモンの侵入自体が稀である。

しかし、夜になると一変して、一斉にむしポケモンたちが動き出す。しかも繁忙期となると防衛に手が足りない程の勢力で。

そこで登場するのが、トキワの森のピカチュウ一族である。

よくは分からないのだが、おそらくピカチュウたちの中で何らかの武術が生まれている。

長老衆は日が落ちると同時に圃場内に陣取る。それぞれが一定の間隔をあけて木の上に静かに座すと、自身を中心に同心円状（球状）にほうでんを始める。この放電は肉眼では確認できず、同じでんきタイプが初めて察知できる代物らしい。デンリユウがそ

う教えてくれた。

一見して穴だらけで、且つ無意味に見えるそのほうでんは、リーダーとしての役割があるようだ。

樹体を包んで空と地面とを網羅しており、それぞれのほうでん同士が接触していることで、隣のほうでん範囲で異常があつた場合は、互いに即刻感知できるらしい。

そしてでんきタイプの視界には、異常があつた場合にほうでんの膜表面が波打つため、ほうでんしていない圃場巡回班のピカチュウにも、むしポケモンの侵入が察知できるのだとか。そしてその巡回する若い衆が迎撃する、とそういう仕組み。

ここ以外でそんなピカチュウがいるという話は聞いたことがないため、ほぼ間違いなくトキワの森固有だろう。

何故こんなことになっているのか。トキワの森がピカチュウ一族一強となつて生態系が狂っていないか、今更ながら不安である。

○月▲日

サイレントキラーなのかな？ と圃場を囲う柵の外で事切れたむしポケモンに首を傾げて始まつた1日。

取り決め通り、長老衆と若い衆は、昨晩夜通し防衛してくれたらしく、『骨が折れた』と言わんばかりに地面に寝転んでいた。そんな長老衆に、彼等にとって極上の寝床であ

る敷き藁に昨晚包まってぐっすり眠ったピチューたちが群がり、疲労の溜まった老体を酷使させていた。

やんちゃ坊主が多いようである。

それはさておき、若い衆も腕をあげたようで、最近では然したる戦闘音も立てずにむしポケモンを制圧できるようになったらしい。それにでんきショックに頼らず、肉弾戦のレベルも上達しているようで、昨晚は圃場の方から電光が閃くことは殆どなかった。

圃場がある関係上、マサラタウンの外れにウチがあると云っても、真夜中にかみなりを落とされでもしたら近所から苦情が入ることは必至だったため、ピカチュウたちの体術のスキルが上がることは喜ばしいことである。

??もしかしくなくても、俺の手伝いをしているからピカチュウたちが普通でなくなっているのだろうか？

いや、そんなことはない。ないはずだ。

と、そんなことより事切れたむしポケモンの処理である。

弱肉強食。俺も生活がかかっている以上、害を為すポケモンの駆除は致し方なし。

森の中にヨクバリスに穴を掘ってもらって、ケーシイに死骸を運んでもらって埋葬した。

このむしポケモンたちも何れは朽ちて土に還り、新たな生命を育む床土となっていく

のだろう。姿を見なくなった長老衆の一部も、そうして世界を循環する輪の中に入っていったのだと思う。

?? 偶には、こういう真面目な日記もいいのかもしれない。

日記：喜劇劇的悲劇的

○月○日

きのみめの注文の取りまとめや農園のホームページの管理を担当しているロトムから、最近やけに一般消費者からの注文が多いと相談を受けた。

収穫が盛んなこの時期になると注文量が多くなるのは毎年のことなのだが、それを上回って『やけに多い』とは甚だ疑問だ。イエローがポケモン大好きクラブで宣伝でもしたのだろうか？ 明日連絡を取ってみよう。

○月？日

原因はイエローではなかった。先日のレッドとの対戦動画がP i k a | T u b eに無断で投稿され、拡散されたためらしい。

個人で楽しむ分には特に文句は言わないが、当事者の許可なくアップロードするのは如何なものかと。しかも一般人の俺ならまだしも、レッドが映ったものを地方リーグの公式チャンネルからではなく、何の関係もない一個人から発信するのは後々怖いと思う

のだが。主に権力的な意味で。違反金としてどぎつい額の請求が来る気がする。

見知らぬチャンネル主よ、達者で生きろよ。たぶんマサラタウンの住人なのだろうけども。

とまあ、そういう経緯があったらしく、何だかんだで農園のPRとなったらしい。世の中何が広告として機能するか分からないものだ。

○月☆日

満月の夜だったからか、ゼルネアスが農園にやって来ていた。

そのゼルネアスもきんにくと同様、ある日突然ウチに現れたポケモンであるが、きんにくんの何倍も劇的な出合い方をしている。

もう10年程前の同じ満月の夜。きのみ苗木を新植するために山林を拓いた当時は、当然ここに農園の形は疎か納屋や倉庫もなく、唯々ただただだっ広い木々のない斜面だけが覗いていた。

そんな土地を喜ぶのは、穴掘り好きなポケモンだけ。進化前のデイグダやモグリユールなどが土を耕して遊ぶ以外、寄ってくるようなポケモンは殆どいなかった。

だから、今思い返してみても何故ゼルネアスがそこにいたのかは分からない。もしかしたら、木々の伐採や、祖父の土地だったとは言え、樹園地に仕立てるのに伴い、元々

そこを住処としていたポケモンを無理矢理追いやったから、だろうか？ 崇り神（※後書きで補足）的な感じで現れたのか。

??いや、今にして思えば、そういう意味合いが強かったのかもしれない。

けど、その考えに達したのは、『ゼルネアス』というポケモンを知識として知った今だからこそ。当時はそんなことは少しも感じていない。それまで1度も見たことがない、というのもあるし、月の下でパツと見た時に、そのフォルムから隣のジヨウト地方で馴染みのあるオドシシかと思っていたから。

で、そこから『劇的な出会い』に繋がるのだが、夜間の見回りついでに出会でくわした月光に灯された『ゼルネアス』に、

「へえ、珍し。オドシシが山越えて来たのか？」

なんて呟いたものだから、猛然と向かってきてそのまま跳ね飛ばされた。

ゼルネアスにとってオドシシと同列に扱われるのは大層気に食わなかったらしく、輪郭の見えづらかった立派な角を7色に輝かせ、俺の土手っ腹を容赦なく抉り、そして掬い上げ、——ダンプカーも斯くやの勢いに悠々と宙を舞った俺は、そのまま何ができるでもなく『ドグシャツ！』となかなかヤバイ音を立てて落下した。

幸い、その事故は全身打撲だけで済んだが、デイグダたちが地面をふかふかに耕してくれていなければ、日記を書く今の俺はいなかったと思う。複雑骨折の変死体として処

理されていたことだろう。

??ゼルネアス、マジでおっかねえ。

ご機嫌でも取りに行こう。いや、行ってきます。

(日記を放り出して、クリアは慌てて農園に出たようだ。このページに不自然にシャーペンの走った後が残っている。)

日記：平穩不穩

×月○日

最近、マサラタウンにやってくる観光客が再び増えているのだという。恐らくレッドとの対戦動画の件が、マサラタウンにも良いPRとなったのだろう。気軽にチャンピオンに会える町とかそんな感じで。出会えるかどうかは完全に運だが、言わぬが花か。

ともあれ、見ない顔触れが増えている。

農園としては観光客向けの収穫体験や青果・苗木・ジュース等の販売をしているから、売上が上がって良い傾向だ。そのうち町の共同農場でも、地元農家と協力して何かイベントを開いてもいいかもしれない。

現在のマサラタウンの観光地とさえいえば、オーキド研究者か、この農園か、それか町の南の浜辺くらい。夏になるとグリーンが長期休暇でサーフィンをしに帰ってくるため、それ目当ての女性客が海水浴に来て賑わっているが、春過ぎのこの時期はまだ閑散としている。精々が地元民が潮干狩りに行く程度。目ぼしい観光地は極めて少ない。

ジムがあればもつと人の往来も盛んだと思うのだが、それもなし、立地的にも田舎

だ。ジョウトやカントーなどの各地方につき、ジム総数は8個と決められているみたいで、今更マサラタウンに、という訳にはいかないらしい。仮にジムを作れたとして、誰がジムリーダーをするのか、という問題もあるが。

故に、別方面で客寄せをする必要があるのだが、これがなかなか難しい。町興しつてどうすればいいのかね。

きんにくんによる筋トレ講座とか企画してみようか？　??いや、町との関連性がなくて無理かな。

(この後、つらつらと町興しに関するアイデアがメモされている。日記を書くという行為から思考が逸れていったようだ。)

×月×日

農園に来る若い観光客から度々握手を求められるようになった。「めつちや強いんですね」やら「やっぱりポケモンだけじゃなくて、農場長さんも鍛えられてるんですね」やら「あの赤いポケモンはどこで捕まえたんですか？」やら、いろんな言葉を貰う。

取り敢えず、前2つの言葉については「ありがとう」と伝えているが、きんにくんが予想以上だっただけで、俺自身の腕っ節はそう強くないだけだな？　付いている筋肉も農業由来、所謂『農筋』だし、きんにくんは別に捕まえた訳でもなく、居着いてい

るといものが正確なところだし。然程違ひはないから態々訂正はしなかつたが。

それにしても、結局きんにくんはどこからやって来たのだろうか？ オーキド博士曰く、アローラ地方で以前、類似個体の目撃例があつたらしいが、そこで情報は途切れていふという。それ以降は姿が確認されていない、ということではなく、地元の研究仲間と言わせると『意図的に情報が消去されたような不自然さがある』とのこと。陰謀論が主張されそうな感じだなあ、とチラツと思つた。

×月△日

ヨクバリスがきんにくんによる肉体改造を始めて約ひと月。心做しか頬周りがスッキリしてきて感心したが、よくよく考えてみると頬袋に何も入っていないなかつただけか。あんまり変わっていないなかつた。

ただ、体力に関しては微増しているようで、着実に成果が上がっている様子。このまま頑張つてくれることを願う。

×月□日

デンリユウの毛刈りをした。

ウチのデンリユウは一般的なデンリユウと違って頭と尻尾に長く白い毛が生えてい

る。メリーブと同じで、人が管理しないと際限なく伸びていくようで、例年と同様にバリカンをたてがみと尾に通してやった。

普段見慣れているだけに、普通のデンリユウの見た目になるのは違和感がすごかった。だからか、ヨクバリスやミネズミ等から指を差されて笑われて、仕返しとばかりにかみなりを落としていた。その衝撃で倉庫のブレーカーが落ちたため、デンリユウには口トムから別の意味で雷を落とされていたが。

ポケモン同士の仲が良いのはいいことである。

×月?日

きんにくんを尋ねて国際警察を名乗る輩がウチにやってきた。

どこで捕まえたのか、不審なところはないか、危険な目にあってないか、等々、事情聴取をされた。

端から危険視している様子だったが、一従業員として日々働いてくれていて国際警察が言うようなことは一つもない。

大丈夫です、といってお引き取り願った。きんにくんにもこの事は一応伝えておいたが、サムズアップを返されただけだった。特に不安がっていないのだろう。

心強いやら呆れるやらで、きんにくんらしいと言えばらしい。少しばかり安心した。

×月×日

冷静になつて考えてみれば、先日の国際警察を名乗る輩はきんにくんについて詳しく知つていそうな口振りだった。知る絶好の機会を逃してしまつた感が否めない。

??まあいい、明日からまた頑張ろう。きんにくんはきんにくんだ。何も心配することはない。

日記：しばき倒すぞ

×月■日

昨日の今日、というか、先週から珍しい客が続いている気がする。今日はポケモン大好きクラブの記者が取材にいいですか、と急にやってきた。それなりの年齢のおじさんだったが、仕事の話をアポイントもなしに、とは如何なものかと。こちらが若いからと侮っているのか。

客商売というのもあって、ひとまず角を立てないよう昼休憩の時なら対応できると答えて、それまでは農園に併設するカフェで寛いでもらったが、次からしつかりアポイントを取ってもらおうよう言っておいた。農園のホームページからでも、電話でも簡単にできるのだから。

取材の内容は、農園で働いているポケモンについてだった。『働く車』ならぬ『働くポケモン』で特集を組みたいのだそうだ。

初対面の悪印象から内心『ああ、そう』と酷く平坦な感想だったが、農園のPRになるのなら対応も吝かではない。

事務担当のケーシー・ロトムから始まり、収穫担当のヨクバリス・ミネズミ、灌水担当のヌオー・ヤドキング、防除担当のデンリュウ・オーロット、土地改良担当のダグトリオ・ドリユウズ、運搬担当のローブシン・きんにくん等々、主となって作業をしているポケモンを中心に説明した。それぞれの作業写真も撮りたいということだったので、了承したポケモンに対しては許可を出した。

何度か原稿の確認を挟んで、ひと月後に献本を送ってくれるとのこと。うちのポケモンたちは完成が楽しみなようである。

×月?日

栽培するきのみの品種選定は、周年出荷ができるように組んでいる。だから年中収穫作業があるにはあるが、殆ど今の時期に集中している。冬場は選定が主となり、俺の作業負担が大きくなる代わりに、多くのポケモン従業員にはちよつとした長期休暇。今の時期にあくせく齟齬働いてもらって、後でしっかり体を休めてもらうサイクルに調整している。

だからと言って、こうも頻繁に収穫体験やカフェ以外の客が来てもらっても困るのだが。

今日来たのは、先日の国際警察官だった。しかも開園した朝一に。いやいや、待てよ、と。常識で物事を考えろよ、と。

まずアポイントとってから来い。急に来られても仕事がある。特に今は収穫時期で朝は非常に忙しい。だから帰れ。それに何か？ 今日作業に影響が出たらお前が損失分を補填してくれるのか。そういったことを横柄な態度が鼻につくのもあってオブラートに包んで言っちゃった。

大人なら守るべきマナーを守ってから来い。

何が「ウチは国際警察ですよ？」だ。他者を尊重しないやつにそんな薄っぺらい脅迫をされたところで痛くも痒くもくもない。そもそも、それなら地元警察に話を通すのが筋つてもものだろう。田舎町だからと舐め腐っているのか。威張り散らすだけなら誰でもできる。

ここには2度と来るな。仮に来ても客を騙かたるな。

しばき倒すぞ。

(酷く苛付いていたのか、乱雑な字体で殴り書きされている)

×月☆日

ポケモン大好きクラブの記者から原稿案がメールで送られてきた。別段可笑しなことも書かれていなかったし、問題ない旨の返事をした。

度々雑誌に載ることはあるが、ポケモン大好きクラブの雑誌では初となるため、来月

号のクラブ誌に俺の農園のポケモンが紹介されることをイエローに連絡しておいた。

あと、件の記者くだんに関してもクレームを入れさせてもらった。名誉会長として実質的な権力はなくとも、会長の方に話を繋ぐことくらいはできるだろう。

×月■日

×月◇日

×月◆日

・
・
・

(暫くの間、日記が書かれていない。)

マサラタウン：きのみカレーの日

その日、クリアは午後から休暇をとっていた。

週に2度ある半日不定休の前半。夕飯の食材を買いに行くときとケーシーに伝えて、彼はいつもの作業着姿で町に繰り出していった。

クリアが買い出しに行く日の夕飯は、決まってカレーとなっている。それは農園で働く^{従業員}ポケモンたちにとっては周知の事実で、新入りのマツシブーンにとっても、ここひと月の生活の中から自然と導き出せる事実だった。

ポケモンと共に食せるカレーは、ポケモンとの仲を深めるのに効果的というのが分かってからトレーナーにも広まっている。クリアはその数あるカレーの中でも、彼の職業の恩恵を大きく受けるきのみカレーの専門家だった。

豊富なきのみ知識と、ポケモンの好みを選び当てる感性。

それらは農業界を飛び出して料理業界でも重宝されており、料理雑誌には定期的なコラムが掲載される程。つい先月も馴染みの料理研究家からの協力依頼を受けて、今時期におすすめのきのみと、主婦向けの店頭での目利きについて情報提供を行ったばかり

だ。

彼の作るカレーは、きのみを専門に取り扱う者の矜恃に溢れている。つまり、農園で働くポケモンのツボを寸分の狂いなく押さええているということ。それは当然、マツシブーンでさえも例外でなく。

あるポケモンには辛味を強く、あるポケモンには渋味と苦味を加え、あるポケモンには仄かな酸味を、あるポケモンには飛び切り甘く。それぞれの好みに合わせたバリエーション豊かなカレーを作っている。

そしてこの『カレーの日』には、もう一つ、『特別』がある。

それはいつもであれば納屋や倉庫で揃って食べるところを、この日だけは、日中カフェとして解放している建物を食堂として利用できるのだ。普段とは違う場所で食べる夕飯は、いつも以上に料理を美味しく感じさせる。

だから日が暮れ、1日の仕事が終わると、作業の汚れを落としたポケモン^従たちが続々とここへ集まってくる。

今日は何種類のカレーを振る舞ってくれるのだろうか。今日も沢山食べられるだろうか。そんな想像を働かせながら、クリアの帰りを待っている。器用に食器を用意して、いそいそと大鍋をコンロに上げて、傍目からでも楽しみな様子で待っている。

そうして短針が6時を回り――。

いつもであれば疾うに料理に取り掛かる時間でありながらも、件の料理人が戻らないことに『嘗てないほど美味しいものを作ってくれるに違いない』と各自の期待を膨らませて、——針は進む。

短針は7時を過ぎ、8時を超え、9時に達し——、それでもクリアは帰って来ない。町の明かりが次第に消え、夜の帳が静かに下りる。

見回りのために後ろ髪を引かれる想いで席を外したオーロツトに、朝から作業していたポケモンたちがテーブルに着いたまま船を漕ぐ。耐え難い睡魔に襲われた彼等が本格的に寝入るのに時間はかからず、過ぎた時間を示すように、いつの間にか円の頂上で2本の針が重なっていた。

明かりを灯したままのカフェの中で、規則正しく時計は時を刻み続ける。

ポケモンたちの寝息が響く屋内に。
突如。

カランカランとドアベルが鳴った。

はつと目を覚ましたケーシーに、眠たげに眼を擦り起きたヨクバリス。

クリアが帰ってきたのだということに気付いた2匹は、『遅い』『待たせやがって』と内心憎まれ口を叩きながらも、期待に満ちた眼差しで素早く入口に振り返っていた。

胃袋を掴まれた彼等は主人に弱い。散々に待たされたという想いも、クリアが漸く

帰ってきたとなれば知らず知らず思考の彼方に追い遣られる。

「悪い、待たせた」

そんな謝罪も何のその。その言葉を言う暇があれば今すぐカレーを作って欲しい。

2匹はそんなことを幻視して――、

「????」

ドアについた小さなガラスから白んだ空が覗いていた。

夜が明ける。

鳥の囀りが爽やかな朝の気配を感じさせ、新たな1日の始まりを告げている。

それは同時に、開業時刻が迫っていることをも意味している――。

我に返った2匹が、慌てて寝こけているポケモンたちを起こしていく。

農園での仕事は、主人不在のまま始まるうとしていた。

マサラタウン：農場長ケーシー

農園では、クリアが不在の場合でも問題なく運営できるよう、あらかじめ予め体制を整えてい
る。

故に、開園の時間になってもクリアからの連絡がなかったこの日、農園の全権を担う代理農場長として、ケーシーの裁量に全てが任されていた。

ケーシーとクリアの付き合いは、クリアがまだまだ幼い頃から続いている。それこそクリアはケーシーと共に育ったし、ケーシーもまた、クリアと共に成長した。クリアが農園で最も信を置く存在と言えば真つ先にケーシーの名が挙げられる程、彼等の間には深く強い繋がりがある。人間とポケモンという異種族ながらも、その関係は『兄弟』と呼ぶに相応しい親密さだった。

ケーシーにとつて、クリアの考えは手に取るように分かる。生まれてこの方、クリアとの意思疎通の凡そわおよをテレパシーで取っていた賜物か、下手な熟年夫婦以上に言葉を介さずに思考を読めてしまう。

それが、こと今回に限っては全く以て理解できなかった。

だからこそ、却^{かえ}つてその実感が、この失踪をクリアの本意ではないことを高い確度で告げていた。

クリアの身に何事かが生じている。クリアの居場所を突き止めるために動かなければならない。

けれども、今日のケーシーは代理とは言え『農場長』という立場にある。おいそれと行動に移せず、仮に動き出すにしても順序がある。

ケーシーはこれからの事を思案する。

農園を開くべきか、閉めるべきか。

従業員はクリアの失踪如何に関わらず農園にいるため、営業はできる。カフェも同様に開店は可能だが、何も言わずにいなくなったクリアを想って心ここに在らずな者達に頼るのは名案とは言えない。

しかし、そういった様子ながらも、きのみの出荷については既に業者に運送を依頼しているため、緊急時と言えども普段通り行う必要がある。直前になって『今日はお荷できません』などと無理を言っても信用を失うだけだ。利害で繋がる者との信頼関係を損なうことは、観光客など人情で繋がる者との関係に空白をあけるのとは訳が違う。これまで築き上げてきたものに傷を付けるような行いだ。

結果として、ケーシーは従業員に対して『きのみの出荷だけを行い、クリアが戻るま

での間は閉園すること』を傳達した。



ケーシイがまず初めにしたことは、スマホのGPS機能を用いた位置情報の割り出しだった。

幸い、農園には電子機器に精通している、というより『それそのもの』と言い切つても良いようなロトムがいる。現実と電子世界との間を行き来する性質を十全に發揮してもらい、ロトムには農園のPCを足掛かりに広大な情報世界へと潜ってもらつていた。

クリアのスマホの特徴は覚えている。日頃、ロトム手ずからセキュリティチェックとセキュリティ対策を講じているため、スマホ内にはロトムの固有因子が多く散りばめられている。情報の通信と共に電脳世界に流れ出したそれを、濃度の濃い方へと辿つていけば、自ずとクリアの居場所は判明する。

——クリアの居場所を特定するのに、そう時間は掛からない。

確証を持ったその推察は、紛れもない真実であった。

ただ、ケーシイもロトムも当たり前のことを失念していた。この方法で解決に至るためには、そもそもスマホの電源が入っていないなければならないのだと。

ロトムが知り得たのは、『昨日の夕方——恐らくクリアが農園への帰路に就いたとこ

ろで、位置情報の通信が途切れている』ということ。それ以前の座標がマサラタウンから農園に近付く形で軌跡を描いていたことから、帰り道であったことは間違いない。更に遡って見ても、スーパ―内部を歩いていたことから揺るぎない事実だろう。

位置情報から割り出すクリアの行動歴は、街中で忽然と途絶えていた。それもその時間であれば人通りが疎らということはない。学校からの帰宅途中の学生や、クリアと同じように買い出しに出掛けた主婦が多くいたはずで、事件に巻き込まれたとか、暴力に遭遇したとか、そういった可能性は極めて低い。その時間帯のSNSの動きを探っても、該当しそうな事柄は話題に挙がってはいなかった。違法な手法から、マサラタウンの住民のものと割り出したアカウントを網羅してみても、だ。

そのことから、クリアは恐らく自発的に電源を切った。相手は顔馴染みか、それ以外の『警戒する必要なく、素直に提示された条件を承諾できる相手』であったということ。しかし、それが分かったところで、ケーシーとロトムはこれ以上その相手を特定する術を持ち合わせていない。

もしも、ここがタمامシシティ等の都市であれば、街中に設置された防犯カメラをハッキングすることで相手の姿形を確認できたかもしれない。今回のような場合に於いては残念ながら、マサラタウンにはオーキド研究所や銀行など、重要施設にしか設置されていない。念の為それらのカメラも確認したが、希望の映像は撮影されていなかった

た。

PC画面に埋没していた雷状の触手を引き抜いたロトムは、ケーシイに向き直ると否定するように体を振るわせた。そのジェスチャーの意味は誤解のしようがない。クリアの痕跡探しは失敗に終わったのだ。ケーシイは正確にロトムの意図することを把握して肩を落とす。

となれば、ケーシイの取る手は次に移る。

身内で出来なければ、他者に——権力に頼る。しかし、クリアが直前に出会ったと思われる人物像が大まかに推測されたことから、警察に向かうのはもしかすると大袈裟な結果を生むかもしれない。そんな人間染み配慮から、ケーシイはクリアの幼馴染の元へと跳んでいた。

その時、時刻は昼を回っていた。

マサラタウン：VSチャンピオン

久方振りに四天王を降し、チャンピオンに挑む者が現れた。

その赤髪の少年の名は、シルバー。

以前、挑戦者の彼と同じようにこの場まで辿り着き、そして見事に玉砕したゴールドという少年と同郷——ジョウト地方のワカバタウン出身だという。

シルバーと見えた時、レッドの臆気な記憶の片隅に、彼の赤色とよく似た赤が残っているような気がした。が、思い出せないということはそう大したものでもないのだろう。

彼は意識を切り替え、何らかの意志の籠った強い眼差しに真っ向から応えていた。

チャンピオンを見据える双眸に、胆の据わった少年だと、レッドは素直に感心した。憧れなどという浮ついた感情は、その真っ直ぐな瞳からは窺い知れない。

それよりももっと攻撃的な、対抗的な色が深かったが、嫌悪とは違う。レッドの感性からは言い表せない特殊な感情の発露が、そこにはあった。

無言で佇むレッドから、対戦者に掛ける言葉はない。

今までも、これからも、レッドは唯一の君臨者として——絶対強者として、洗礼を受けてなお這い上がって来た者達を全力で以て叩き潰す。ここに戴くにはその実力では力不足だと、完膚無きまでに磨り潰す。

手心を加える余地はない。態々手加減する、その調整が煩わしく、それは逆説的に、レッド自身を基準に、高みを目指すにはお粗末な能力であると判じていた。

地上を這うが如く、無様。故に、再び地に這い蹲るのがお似合いだと、容赦なく劣等感という心折る刃を突き付ける。

それこそがレッドのチャンピオンとしての顔であり、妥協を許さない負けず嫌いな性格の顕れだった。

マサラタウンでクリアに対戦を申し出たレッドとは、完全に纏う雰囲気異なっている。抜き身の刃、などと生易しいものではない。殺つて喰らう殺気の奔流。仮に大気の色付くならば、彼の周囲は濁り赤黒いものが滞つていたことだろう。ともすれば血臭を錯覚していたかもしれない。

それ程に闘気が漲っている。

それを前にして、しかしシルバーは怯まない。

「??チャンピオンに1つ、尋ねたいことがあります」

????????
「」

モンスターボールから相棒のリザードンを解き放った。

対戦を前にした問答に、レッドは微塵も応えるつもりはない。

ただ、その挑発的な視線は、彼の内心を雄弁に物語る。

——もしも俺に勝てたなら、その時は好きなだけ聞いてやる。

傲慢さが垣間見える。然れど幾度となくチャンピオンの座を防衛してきた、実力に裏打ちされた余裕。侮っているのではない。これがレッドの自然体だった。

レッドに近いレベルにまで昇華しているシルバーという少年は、納得の末、自らのモンスターボールに手を掛けた。

シルバーの手持ちは、レアコイル、クロバット、ニユーラ、オーダイル、フリーディン、ゲンガー。

対するレッドの手持ちを、シルバーは既に知っている。

現在場に出たリザードンに、フシギバナ、カメックス、カビゴン、ラプラス、そしてピカチュウの計6体。

各地のバッチを集め、セキエイ高原に夢馳せる時、挑戦者はまず初めにチャンピオンリーグ公式サイトに辿り着く。そこにはチャンピオンを初め四天王の繰り出すポケモンが公表されており、少しでも勝率を上げるために挑戦者は有利な編成を考えるのだ。

シルバーも数多いあまたいるチャンピオンを目指す者達と同様に、公式サイトはチェック済であつた。とは言え、生半な実力ではチャンピオンリーグを踏破することなど夢のまた夢。到底太刀打ちできるものではない。

そこを曲がりなりにも達成してきたシルバーは、一先ひとまずの挑戦権を得た状態だつた。だから平静に見える彼の内心は、凄まじい程の緊張感に満たされていた——とはならない。彼がチャンピオンを指した理由は、その座に座ることに憧れたからではない。チャンピオンという肩書きよりも、レッドという青年と一度話して見たかつたのだ。

——あなたはあの時、何を思っていたのですか。何を感じていたのですか。

ただ、それだけを問いたくて、その一心だけで強さを求め、ここまでやってきた。その執念は並外れたもので、喩えたとレッドの抱くものと比較しても決して劣るものではない。

父の失踪と、その原因となつた事件と直接的な関係を持つチャンピオン。

遂にここまで来たという達成感と、あともうひと踏ん張りという振り絞つた気合い。

タイプ相性通りにオーダイルを出したシルバーの内心は、正直なところ、話が出来ればこれからの勝敗に特に拘りこだわはなかつた。負けたとしても胸に巢食つていた蟠りわたがまは解消され、2度目の挑戦を望むことはないだろう。恐らく悔しさなども無縁なはずだ。

しかし、チャンピオンとの会話のために、勝利という条件が提示された。ならば、その条件を飲むしかシルバーに取れる選択肢は残されていないかった。

目を閉じ、心を落ち着かせるように深く息を吸う。

そして瞼を上げた時、それが試合開始のゴングとなった。

◇

素早さに優れていたのはオーダイルだった。

分厚い皮の下で筋肉が鳴動する。2足から4足での疾走。体軀に見合わぬ俊敏さで距離を詰めた青い影が、初動の遅れたリザードンに襲いかかった。

大口を開けたかみくだく。

それは自然界で狩りをするような容赦ない一撃で、如何なるものであれ食い潰す、万力の顎から繰り出される圧倒的暴力。獲物に対して舌舐めずりをするように、唾液の纏わる無数の牙が光を反射して鈍く光った。

長い首を目掛けて迫った頭部が、——身を翻したりザードンの尾により弾かれた。横つ面を強烈に叩き付けられ、オーダイルの顔面に痺れが走る。

左方に流れた体。思わず瞑られた右目。

大きな隙を見逃さず、リザードンは攻勢に転じていた。

レッドトリザードンの間に指示はない。

それはつまり、クリアとの一戦は、飽くまでパフォーマンスでしかなかったということ。

真に心を通わずトレーナーは、無駄な指示を挟まない。現にシルバーとオーダイルの間にも、指示らしい指示は発せられていなかった。

トレーナーは、ポケモンの視覚・聴覚・嗅覚・味覚・触覚・第六感——五感+? α に更に付け加えられる第7の感覚器。ポケモンの目であり、耳であり、鼻であり——、戦況を俯瞰できる神の視点。

闘争の当事者たるポケモンの不足部分を補う外部器官だ。

トレーナーが指示を出すということは、即ち、闘うポケモンの察知できない、或いは察知しにくい事象が起こり得ているということ。

今回に於いても例に漏れず、シルバーがこれから発する命令は、オーダイルの右目が暫くの間に使えない物にならないことを予感してのことだった。

リザードンの左腕さわんが唸りを上げる。

ドラゴンクロー。硬質な爪が追撃とばかりに放たれた。

「オーダイル！ ねっとう！」

鋭い技の咆哮。

その意味を理解した瞬間、オーダイルの口から大量の熱湯が吐き出された。その水流

はりザードンに向けられたものではない。差し当たって回避するための、そして自身に有利な場を整えるための第一手。

床に叩き付けられる水流は、遮るものがない水平方向へと広がっていく。濁流の勢いで膨れていき、あと一步という距離に詰めていたりザードンの巨体をも押し流す。

トレーナーの立つ場所から一段低く造られたフィールドは、瞬く間に湯気の立ち上る温水プールの様相となっていた。

「続けてなみのりだ！ 全力で押し潰せ！」

水を得た魚のように、水底に張り付いていたオーダイルが、一気に水面に浮上する。そのまま矢のように跳ね上がると、追従して幾つもの高波が発生した。

波に取り込まれるようにして引いていく水位。

水に沈んでいたりザードンの姿が顕になる。

「プラスチックバーン。喰い千切れ」

静かな神託。世界最強の王者の威光を孕む、絶対的な命令。

尻尾の灯火を守るため、翼を大きく広げて身を包んでいたりザードンが、水滴を弾くように強かに羽搏いた。それと同時に縦横無尽にエアスラッシュが発生し、周囲に薄く溜まる水を追い遣った。

——激震が、走る。

宛ら、^{さな}太陽の如く。

驚異的な熱量が迸り、リザードンの号砲に合わせて爆発が連鎖する。力強い連弾で奏でられる爆音が、オーダイルに喰らいつくように大気を走った。

「ぐっ?!?!」

シルバーが苦しげに呻く。

トレーナーへの衝撃は、それぞれの左右に控えるフーデインのミラーコート、光の壁により大幅に減退している。それでも肌が痺れるような感覚を受けるのは、決して眼前の光景に圧倒されたからだけではないだろう。

破壊の連続は、オーダイルに近づく程に肥大する。

セキエイ高原に聳えるチャンピオンリーグそのものが揺れるかのようだった。それが錯覚か、事実か、ここで闘うシルバーには確かめようがない。

天の空いたこのフィールドから、もしかしたらカントー・ジョウト地方全域に破滅の胎動が響いているかもしれない。それを同様に判ずることは出来なかったが、シルバーにはそれが現実であるようにしか思えなかった。

オーダイルのなみのりがリザードンを飲むのか、^{はたまた}将又リザードンのプラスチックバーンがオーダイルを蹂躪するののか。

改めて考察するまでもなかった。

——両者が、激突する。

熱波が波を食い破り、水蒸気が発生する。

そこから繋がる数多の轟音。外気に冷やされ、白い霧が戦場を覆い隠し、オーダイルの安否が案じられる。

果たして、オーダイルは生きているのだろうか。

試合に於いて意図的に生命を奪うのはご法度だ。仮に意図的でないにしても、耐久力には当然のことに限度がある。ポケモンが人間と比べて軒並み耐久力が高いと言つても、並のポケモンではリザードンのブラストバーンに耐えることはまず不可能。タイプ相性があつたとしても、優にその壁を超えてくる。

千千ちちに砕けた大波が、幾らかの飛沫を残して霧散する。その飛沫の音さえ今では聞こえると言うのに、可笑しなことに、

重いものが落下するような音は聞き取れなかった。

「リザードン、かぜおこし」

シルバーのみならず、レッドが違和感に顔を顰める。

レッドの見立てでは、影も形もなくこの世から消し去るほど、オーダイルの耐久は薄っぺらなものではなかった。寧ろ五体満足で耐えるだけの優秀ながたいであると感じていただけに、引っかけかりを覚えたのだった。

真相を確かめるためにリザードンの巻き起こした風により、霧は払われる。

その先には漂う影が2つあり――、

『――』

それを認めた時、トレーナーの左右に控えていたフーデインが一齐に頭しんがくを垂れた。

何事かと思うシルバーに、納得したようにレットは息を吐く。

「くう??、相変わらず?!!」

呆れた溜息と共に頭かぶりを振り、再び見上げた視線の先。

リザードンに翳した手の中で極小の太陽を丸め込み、

「悪いが今は試合中だ、後で出直してくれ――」

もう一方の手で気絶したオーダイルを浮遊させ、

「――なあ、クリアんとこのケーシーさんよお」

クリア農園からレポートしてきたケーシーは、静かにレットを見詰めていた。

マサラタウン：テレパシー

——クリアとて成人した一人の男だ。帰宅が遅いからと言って心配する必要はない。未成年の子の親のように『いつ帰るのだ』という催促は過保護が過ぎるのではないか。ケーシイの態度に、そのようにレットは思わなかった。

◇

リザードンの側がわに向けたケーシイの掌。その中で極小の太陽が輝いている。

卓越したねんりきにより包まれたそれは、ブラストバーンの残滓。もしもポケモンの能力を数値化した『レベル』、或いは彼等の使う技に『熟練度』というものがあるとするのならば、このケーシイのねんりきは、そういった数値化した概念を天元突破していることだろう。

扱うポケモンの個体差はあれ、普通のねんりきではこれ程の芸当はまず不可能だ。真に優秀な個体のサイコネシスでないとは再現性は低い。しかも『レットのリザードンの』という枕詞がつくととなると、万に一つも有り得ないだろう。

そうした諸々を勘案して、クリアのケーシイは破格の能力を有していた。敬うような

フリーデインたちの態度にも理解できるものがある。

『レッド、緊急事態』

「つ、突然のテレパシーは止めてくれ??. クリアほど慣れてない」

『ゴメンなさい?!』

怯んだように仰け反るレッドに、申し訳なきそうにケーシーは謝る。

普段、クリアは事も無げにケーシーとテレパシーを行っているが、一般人にとっては自らの思考の中に突然他者の思考が割り込むようなもの。慣れない者が受けてしまうと脳内信号が交錯してしまい、今のレッドのように意図しない反応を起こすことが屢々ある。

そして、クリアとのテレパシーの際は、言葉のほかに互いの思い描くビジョンをも送受信している。その出力は、恐らくエスパータイプのポケモンとそのトレーナーとの間で行われる一般的なテレパシーと比べても桁違いに高い。クリアにする気安さで同様のことを他人にしてしまうと、必然的に相手の脳に過負荷を強いることになってしまうのだ。

故に、自然とクリア以外では加減した上で慎重に行うこととなり、言葉にもどこか辿々しさが出てしまう。

また、テレパシーを受容する相手の脳容量を考慮すると、長文で伝えるのは不適。単

語を区切って伝えることが最前なのだ、ケーシイはレッドやグリーンを初めとしたクリアの幼馴染を被検体として学んでいた。

だが、単語の羅列による意思疎通は、どうしても情報量が制限されてしまう。省略するものが多くなってしまうから、当然と言えば当然だ。

だから警察に赴くよりもクリアのことをよく知る幼馴染を頼ったことは、もしかすると『最善』を偶然にも選べていたのかもしれないなかった。

『至急用件。クリア、昨夜失踪。連絡皆無』

「ん？ クリアが連絡もなしにいなかったのか？」

『ソウ。ロトム調査、情報僅力。下山後、痕跡消失』

「ロトムってことは？、GPSか？ それが町に降りてから追えなくなったと」

シルバーそっちのけで顎に手を当てて考え出したレッドに、ケーシイはこれまでの考察を述べていく。

『ソウ。失踪直前、人ト遭遇、可能性大。オそろク、知人、アルイハ、警戒不要ナ類』

「なるほど？、つつつてもあいつの交友関係は狭いからなあ。仕事上の知人なら多いだろうけど、『マサラタウンでの知り合い』つつつたらそうはいないだろうな？！」

『肯定。故ニ、警戒不要ナ類、ト推測』

「『警戒不要』か？。そもそもを聞くが、何でその推理になったんだ？」

『信号途絶。原因、電源切断。町中、破壊・破損可能性低』

「ん〜?、『GPS信号が途絶えたのは電源を切ったから。町中だから壊された訳ではないだろう』と。自分で切るとも思えんし、『言われたから切った』か。??ってんなら警戒心が薄くなる知り合いか、??思い付かんけど、例えば子どもとかの警戒する必要がない相手か、つてのを言いたいんだな、なるほどな。そうなった場合、その『警戒不要な者』か、或いはその後ろにいる別の輩が犯人か」

『オそらく。GPS痕跡確認。現場未確認』

「現場は一旦見に行った方がいいと思うぞ。警察行つてジュンサーさんにガーデイでも出してもらうのがいいだろ。クリアんところには鼻が利くやついなかったろ?」

『肯定』

「なら決まりだな。一応オレから話は通しとく。それとオレの知り合いつてのが分かるようにこの帽子持っつけ。くれぐれも失くすなよ」

そう言つてフリスビーのように投げ渡されたレッドの赤い帽子は、ねんりきで誘導されてスポリとケーシイの頭部に納まった。

『当然。終了後、返却』

「ああ、頼むぜ。あと、こつちが終わつたら俺も探しに行くわ。ちつとあいつが何も言わずに失踪すんのは不自然過ぎる」

『感謝。ロトム、適宜連絡』

「ん？ ??ああ、メールなりで連絡くれるのな、了解」

『ソウいうこと。また、後程』

言い残して、ケーシイはオーダイルをフィールドに降ろし、そしてブラストバーンの残滓をグツと握り潰すと、再びその場から姿を消した。

「——つてことで、用事ができた。早々に終わらせる」

黙って事の成り行きを見守っていたシルバーに、レッドは無慈悲に告げたのだった。

マサラタウン：行き先

『未知』の事象を回避する。その難度は計り知れない。

『未知』とは読んで字の如く『未だ知らぬこと』。知らないのだから対処のしようがない。安全か危険かも判断できず、もしかしたらその1度の遭遇が取り返しのつかない結果を齎すかもしれない。悍ましく、おそ夥しく、おびただ惨たらしく——、そんな結末を下すかもしれない。

『未知』とは『恐怖』だ。

故に、テレパシーも多くにとつては『未知』であり、精神に直接干渉することから、悪意ある者が行使すれば最悪糜人化する恐れもある、紛れもない『恐怖』。

しかも、それを拒絶する感覚は、テレパシーの経験がなければ容易くは掴めない。経験したとしても必ずしも獲得できる感覚ではなく、当人のセンスに多分に左右される。電話のようにボタン一つで気軽に拒否するのは訳が違う。

一方で、『既知』となれば対処法が生まれてくる。

テレパシーを例に挙げれば、『既知』となったことで拒絶する感覚を掴めるだろう。あ

たかも電子機器のセキュリティの如く、己の精神を防衛する障壁を張ることも可能だろう。

更に、『既知』の深度を掘り下げれば、無意識下でも抵抗することができるだろうし、眠っていようと覚醒時と同等の強固なプロテクトを己の精神に備えることが可能だろう。

そして更に深く、『既知』について精通すれば、相手の意識を受け入れてなお、何の影響もない鈍感とも底なしとも言える許容量へと成長するかもしれない。相手の侵入を許したからと言って、何かしらの情報を抜かれるでも、精神を徒に弄いたずらられるでもなく、ただテレパシーの繋がった感覚だけをフィードバックする空虚な受容器となるかもしれない。

それはもしかしたら、クラッキング側が発狂しかねない、混沌だけを返信するパンドラボックスと化すかもしれない。

——何故、このようなことを唐突に述べ出したかと言えば、クリアの現状が正にそうだからだ。

『未知』を『既知』とし、ケーシィとの意思疎通の中で自然と突き詰められて来た結果、彼のテレパシーに対するファイアウォールは、金剛石の如き強固さを秘めていた。

「チツ、何だこいつ、全然入り込めないぞ?!」 どういう精神構造をしてる?!」

焦ったように悪態を付くのは、サイキツカーの少年。

10代前半の幼い風貌の彼だが、その実、見た目通りの年齢ではない。年齢は既に30を超え、『超能力』という人智を超えた異能を有した影響か、若々しい外見を保っている。そんな彼が、遙々海を越えてカントー地方に踏み入ったのには、とある理由があった。それは、1本の動画だ。彼の所属する組織の情報部が掴んだ、カントー・ジヨウト地方リーグチャンピオンの対戦動画。先月中頃にPikaTubeに投稿され、現在は権利者の申し立てにより削除されているそれが、上司の命を通して彼をこの地に誘った。

動画には、彼等にとって見逃せないポケモンが1体、映り込んでいた。

筋骨隆々の赤い体躯。蚊のような鋭い口吻。カイリキより遅いそのポケモンの名は、マッシュブーン。又の名を、UB02 EXANSION。

彼等が極秘裏に研究している異次元のポケモン——ウルトラビーストの1種だった。サイキツカーの男に下された最重要の命令は、そのUB02 EXANSIONの調査。

そして情報収集のために彼の選んだ手段が、『将を射んと欲すれば先ず馬を射よ』。UB02 EXANSIONの主人と思しき青年——即ち、クリアの拉致、そしてテレパシーによる情報の強奪だった。あわよくばそのまま組織まで連れて帰り、ゆつくり

情報を抜き取ることも考えていた。

だが、現実はその簡単には事が運ばない。

「多少は抵抗されるとは思っていたけど?!?!! それにしても硬すぎる!」

彼も例の動画は何度か視聴している。

対象を把握するために、限られた素材から最大限の情報を読み取るのは、組織の者にとつては当然のことだ。とは言え、今回に至つては情報部が態々クリアの正体を特定するまでもなく、件の動画投稿サイトのコメント欄で『チャンネルと対等に遣り合う青年』として華々しく認知され、加えて従来からメディアへの露出があり、農園のPRを自前のHPで行っていたことから、どこの誰で何をしているのか、赤裸々な情報は労せず入手することができていた。HPには農園の郵便番号や住所、日々の作業ブログも載っていたのだから、寧ろ情報を取り零す方が難しい。

その動画の中で、クリアはケーシーを傍に控えさせていた。エスパイタイプのポケモンと暮らしている者が、そのポケモンとコミュニケーションを取るためにテレパシーを使わない、なんてことは殆ど有り得ない。基本的にエスパイタイプのポケモンは声帯が退化しているから、声以外の方法でコミュニケーションを図るのが大半なのだ。

だからサイキッカーの男は、クリアの障壁も一定の強度を有しているであろうことは想定していた。だが、日頃の意思疎通をテレパシーで行っていたこと、サイキッカーと

してのプライドから、まさかこれほどまで手古摺るとは思ってもみなかった。

青天の霹靂。このような言葉を同じ土俵に立たない——サイキツカーでもない一般人に使う日が来るとは、想像だにしていなかった。

「ムシャーナ！ ネイティオ！ ランクルス！ もっと出力を上げてもいい！ いや、全力でやれ！」

港のあるクチバシテイを目指して道路を走行するバンの後部。座席を倒し、そこで寝かされたクリアの周りに、サイキツカーのポケモンたちが必死の形相で佇み、或いは浮かんでいた。サイキツカーの顛顛こめかみにも、力みによる青筋が浮かんでいる。

それから数分か、十数分か、それとも数十分か。果敢にクラッキングに挑んだ結果、クリアのファイアウオールに綻びが生じていた。

「っ!!」 一気に畳み掛ける！ こじ開けてしまえばこちらのものだ！」

そこに気の緩みがなかったとも言えない。

ただ、そうでなかったとしても、その後の展開はサイキツカーにとっても、彼のポケモンにとっても、そして運転手を務めていた組織の者、助手席に座っていた情報部にとっても、想定外であったに違いなかった。

まさか障壁を破ることで、こんなことに陥るなどとは。

「????」

クリアの唇が微かに動く。

日によく焼けた浅黒い肌。色素の抜けた白い髪。ところどころ汚れた白の作業着に、安全靴、そして作業用の赤い手袋。首には麦わら帽子が掛かっかけていて、腕時計と2本のラバーバンドが左右の腕に巻かれている。

彼の腰に掛かるモンスターボールは存在しない。サイキッカーが取り上げたのでなければ、初めから1つとして彼は所持していなかった。

彼の眩きは、その後口の中で転がって――。

バンの中で威容が膨らむ。

――次の瞬間、

「なっ??!?」

蠢くは赤の巨腕。

車体のドアが弾けるように、強烈な勢いで吹き飛んだ。

マサラタウン：大橋

それがどういふ経緯で彼の体に染み込んだのか、クリアは疎か、ケーシイにも分からなかつただろう。

「??：メタモン、へんしん——」

ただ、可能性があるとすれば凡そ10年前に山林を開拓した時であろうが、それがこのような場面で表面化するのは、それこそ理解の埒外だろう。

一体誰が予想できるだろうか。

「——外骨格：両腕部——『きんにくん』」

テレパシーの防衛手段として、メタモンを自身の手足として利用し、物理的な制圧に移行するなど。

ラバーバンドにへんしんしていた2匹のメタモンが、クリアの呟きに応じて凄まじい速度で彼の腕に纏わり付き、赤い筋肉質なもののへと変異していく。

瞬きの間の、正しく『一瞬』。そんな極短い間に、クリアの腕はマツシブーンのそれに成り代わった。

「なあっ?!?!」

メタモンは広く知られている通り、擬態の得意なポケモンだ。へんしん時の能力は、へんしんの基となったポケモンと同等で、性質も全くの同じ。部分的にへんしんしたからと言ってへんしん元の性質を失うことはない。

つまり、齎される被害は、マツシブーンの膂力によるものと大差ない。並外れた筋力による車体へのダメージとして、順当なものが結果として残された。

「——って、うわあっ?!?!」

単純明快、ドアが弾けた。

人間の腕が異質なものと変容したことに驚きを示したサイキツカーは、押し退けるように、ドア諸共に外に殴り飛ばすように伸びてきた赤い腕を、身を反らして間一髪避けることに成功した。

しかし、ドアはサイキツカーのように脅威を察する脳を持ち合わせてはいない。振り解くように左右に叩き付けられた両腕に、漏れなくバゴンツ！と重い音を立てて吹き飛んだ。

サイキツカーの顔に浮かぶのは、驚愕と唾然が綯い交ぜになった表情だ。

忽ちのうちに『ドア』から『鉄板』に変貌し、流れる景色の後方に鈍い音を立てて転げていく車体パーツに、知らず知らず冷や汗が流れる。

彼には手応えがあった。クリアの意識に張り巡らされたプロテクト——それを破ったという確かな手応え。疑いようもなく、彼の感覚が捉え、彼のポケモンも捉えていた。精神の中でのことであるから、その障壁の分厚さを正確に言い表すことはできない。けれども、彼にとつては、一般家庭に普及している窓ガラスの厚さと変わらない。当初の所感『容易い』『殴れば砕ける』というもの。そう判断する以外に判断のしようがない材質と感じていた。

だが、蓋を開けてみるとどうか。ガラスのような脆い反応を感じながら、その中層は金剛石の如く。加えて金属の粘りがあり、高耐久。

——この男は、UBO2 EXPANSION に関する重大な情報を抱えているに違いない。

その発想に至るのは、必然だった。

そして後押しするように、この防衛反応。

「僕が選ばれて、正解だったよ?!」

上司の慧眼けいがんに、自身のサイキッカーとしての傲おごりの入り混じった賞賛を呟く。

このままカントー地方で情報を抜くのは得策ではない。吹き飛んだドアによる後続車の事故は、幸運にも発生していない。だが、何の問題もなく走行していた車体から急にドアが拗もげたとなれば、善意から通報される可能性は高いだろう。

そうなれば最悪、作戦自体が駄目になる危険性がある。1度クリアを無力化して組織にまで連れ帰る方が、作戦の安定性を取るなら無難だろう。十中八九、これから人目をより集める。

ここは橋の上——マサラタウン東側の山麓さんろくを迂回した海岸線から、セキチクシテイへと伸びる巨大な自動車道の上。片側3車線の有料道路であり、カントー地方の流通に欠かせない大橋だ。

ここには、交通事故発生時の現場特定や通行車両の確認などの観点から、一定間隔で監視カメラが幾つも設置されている。既に道程が大橋の半分を超えたとは言え、もしもカメラの3割でもこのバンの特定に使われたとすれば、恐らく時間はそれほど掛からない。渡り切る前に何らかの形で警察からの接触が予想されるだろう。

だが、助手席に座る情報部には、監視カメラ程度なら幾らでも騙せるだけの手段があった。そういう人材を連れてきている。件の彼女は、今は無き後部座席のドアから突然発せられた大音量に目を白黒させて耳を抑えていたが、そんなものは関係ないとサイキッカーが命令を飛ばす。

「監視カメラの偽装工作は任せたまよ！」

クリアから情報部へ。僅かに視線が切れた瞬間を見計らったかのように、赤い腕が天井を掴む。

ギシツと揺れる車体。その振動に振り返った時には、腕はずりりと外に身を引き上げるように曲げられて、

「——て、ああ?!?!? ランクルスうう!!」

どんつとクリアの体が当たったランクルスも、合わせて車外へと放り出された。

クリアとランクルスで決定的に異なるのは、車体に捕まっているか／いないか。引き留めるものがあるか／いないか。

ランクルスはゴウツツと風に攫われて、風船のように空高く舞い上がった。

「へんしん：両肩部りょうけんぶ——リザードン」

器用にルーフに着地したクリアは、再度口の中で命令を転がす。

彼の腕で『マツシブーンの腕』を象っていたメタモンは、そのまま肩——肩甲骨を起点に橙の翼を形作った。

幅広の道路の左右には、更に広大な海が広がっている。景色は代わり映えせず、100 km/hを超える速度で走行していても然程の速さは感じられない。クリアの白い髪を巻き上げ、肌を打ち、作業着を小刻みに靡かせる感覚、過ぎ去る橋の鉄骨だけが、速さの証明となっていた。

バサリと翼が広がった。勢い付く風をその翼膜で捉える。

びゅうびゅうと耳打つ音は、クリアの背後でその音を変える。

——浮遊感。

パラシュートのように大きく空気を蓄えた翼が、クリアをその空間に押し留めた。足元からバンの硬さが消え、身が投げ出される。

——けたたましく、クラクションが鳴る。

後続車は大型のトラックだった。

高速道路上での数百mと一般道での数百mでは、体感距離が全く違う。例えば1000 km/hと500 km/hでは、単純に倍の差。僅かな時間でクリアと接触するのは明らかだった。

翼が変形する。ドップラー効果を示してクラクションが近付き、重なり、離れていく。風の捕らえ方を変えたことで、危なげなくトラックの横を通り抜けると、メタモンは一度羽撃いた。

空気を叩いた翼が、クリアの体を安全圏へ、上空へと押し上げる。勢い良く眼下を通り過ぎていく車たち。

その車窓からは、呆気に取られた者達の顔が——視線が、クリアを追って、そして追いつけなくなり遠ざかっていく。

彼を誘拐した黒いバンも、遙か前方へと進んでいた。

マサラタウン：祖父

「??つく、??あー、頭がふらふらする??」

大海を眺める形で滞空するクリアが、小さな欠伸と共に目を覚ました。

多くの車が行き交う音や、橋の土台に碎ける波の音など、普段聞き慣れない環境音が彼の鼓膜を騒々しく打つ。それに加えて浮遊感。

寝惚けた頭で適正に処理できていないが、『何か違くな?』と思う程度には違和感を覚えていた。

そして次第に覚醒していき、彼は自身の置かれた状況を正確に把握するに至った。
——何か浮いてね? と。

背後を見返して見れば、レッドのリザードンと似たような翼が上下に動いている。
「むう??? メタモンに命令なんかしたっけな???」

以前、こう説明したのを覚えているだろうか。

『幼馴染の中で、クリアは特段、ポケモンに興味を示さなかった』と。

それは正しくもあり、一部誤解を与える表現だった。

この世界では、ポケモンが人々の生活に否応なく絡んでいる。だから全くの無関心でいることは有り得ない。

幼馴染たちが——レッド・グリーンがチャンピオンを目指すために、ブルーがポケモンの可愛さ・可憐さを知らしめるために、イエローが純粹に『ピカチュウ』というポケモンを好きなために——『ポケモン』という種そのもの、あるいは一部に好奇心を示したように、クリアもあるポケモンに関心を抱いていた。

それが、メタモンである。

メタモンは神出鬼没なポケモンだ。何故なら普段はへんしんしていて、他のポケモンに紛れて生活するため、それと見分けが付かない。粘土擬きのそのものの姿でいることは極めて稀なのだ。

メタモンがこうも擬態するのは、ある説——『生存競争における優位性』という説にほぼ固まっていた。

他のポケモンには爪があり、くちばし嘴があり、腕があり、脚があり——、早い話、自然界で生き抜くのに有利な特徴を持っている。対して、メタモンは不定形な身一つ。ベトベターやベトベトンなどと違って毒といった武器も持っておらず、無手の極みがメタモンだった。

だからメタモンは、へんしんして他種の群れに紛れ、その一生を終える。周囲が違和

感を覚えることなく、へんしんと同時にその種の本能を理解し、自然と溶け込む。まるで超越者からの贈り物でもあるかのように、へんしん元の経験きんげんを授かるのだ。

それほどの優れた擬態能力を持つメタモンを、クリアは『意思を持つ粘土』として物珍しさに心を惹かれていた。

はじめて彼がメタモンを知ったのは、ちょうど物心ついた頃だろう。嘗ては農園のある山ではなく、幼馴染と同じようにマサラタウンの町中で祖父と共に暮らしていた。その頃には既にケーシイはクリアの世話係として傍におり、クリアには遊び相手としてメタモン2匹が与えられていた。

『遊び相手』とは言いながらも、その実玩具のように捏ねくり回して遊ぶ。それも幼さ相当の弱い力でしかない。メタモンは特に痛痒を感じることなく、マツサージのように彼の好きに、彼の気の赴くままに弄ばれていた。

それから彼は、メタモンの特性であるへんしんを介さず、様々な物を作っては壊し、作っては壊しを繰り返した。コップを作り、植木を作り、祖父を作り、ケーシイを作り――、全てを壊してまた何かを作っていく。

彼は生来の気質として、何かを作ることが好きだったのだろう。

飽きもせず、来る日も来る日もメタモンという粘土を祖父が帰宅するまで楽しんでいった。

そして、ふとしたある日、拙い作品の精度を上げるにはどうしたら良いかを考えて、彼はケーシイのテレパシーに目を付けた。その頃になると、彼らの間では生活の一部であるかのようにテレパシーによる意思疎通が行われていた。イメージの遣り取りも同様に行われ、ケーシイを仲介してクリアのイメージをメタモンに送ることに、この時思い至った。

こういうものを作りたい、という想像を共有することで、より精密に、緻密にものを作れるようになる。それはクリアの想像力を高めると共に、メタモンの想像力をも高めることに繋がった。

通常個体であれが実物を見なければへんしんできないところを、クリアのメタモンは想像によりへんしんできる。または記憶を呼び起こし、へんしんできる。

それがどれほどの優位性を生み出すか、態々論ずるまでもない。

そしてその思考は、年月が経つに連れ、研ぎ澄まされていく。

祖父が亡くなり、山林を相続した。

彼の根底にあつたのは、メタモンをより上手く使いたいという想いと、祖父の残したポケモンの能力を十二分に生かした生活。その2つだった。

——あ、思い付いた。

そこで名案とばかりに閃いた。

——そうだ、山を拓こう。きのみ農家になろう。

突飛な思い付きだった。峻しゅんけん険なシロガネ山を優に超えられる飛躍だった。

だが、それは間違いなく、祖父のポケモンたちの力を役立てられる環境であり、メタモンを活躍させる舞台でもあった。

その時に彼は、本格的にメタモンを自身の手足として使い始めた。

ただ、道具として、というとは彼としては納得し兼ねる。寝食を共にしていたから『家族』という感覚の方が強い。けれども、主に作業をするのはクリア自身で、メタモンはその時々の作業に適した特性を持つポケモンの手足等にへんしんするだけ。『使う』という表現がどうしてもしっくり来てしまうのは事実だった。

ともあれ、彼とメタモンは一心同体となった。農園のポケモンや幼馴染のポケモンに擬態するのはお手の物。更に条件付きではあるが、他のポケモンにもへんしんできる。

如何なる脅威が来ようとも、彼にはそれを払い除けるだけの力があつた。

マサラタウン・ラバーバンド（工事完了2020/06/30）

「??てか、何でこんなところ?」

首に掛かっていた麦わら帽子を被り直したクリアは、周囲を見渡して小首を傾げた。

彼の脳裏に残る記憶は、休暇をとってマサラタウンに食材を買いに出掛けた、その帰り道まで。アンテナのような触角のような、何とも癖のある髪型をした少年に声を掛けられたのを区切りに、記憶が霧もやで包まれたように曖昧となっている。

己の身に何が起こったのか。行き過ぎた夢遊病のような形で空を飛ぶに至ったのか。はたと考え付いた妄想を軽く鼻で笑いながら、クリアは燦々さんさんと輝く太陽を見上げていた。

だが、その鼻で笑った想像こそが、——彼の知り得ぬことではあるが——、真実に極めて近かった。

彼は、さいみんじゅつを掛けられた。誰にか、と問えば、無論、サイキッカー——そのポケモンに。

クリアは相手の外見の幼さ故に、サイキツカーの男を『脅威』と判断し得なかった。それは『自身に生じた不可思議な現象』と『直前に出会でくわした少年』との間に因果関係を何ら結ばなかったことから窺える。

また、人が抱く警戒心だけの問題でもない。『ポケモンを連れて歩く人』というのは、この世界では有り触れた光景だ。だからサイキツカーの男がモンスターボールから出したポケモンを連れていたとしても、取り立てて言う程のことでもない。

木を隠すなら森の中。周りの環境に溶け込むのであれば、大胆な行動も目に付かない。それが事実であったからこそ、クリアはサイキツカーの術中に陥った。

さいみんじゆつは、素晴らしく応用の利く技である。

ポケモンバトルに於いて、相手の行動を縛るとするのは、有利な試合運びを実現する常套手段。そしてあらゆる生物に共通して最も無防備となる瞬間とは、即ち、睡眠時。だから試合では『相手を眠らせる』という点に重きを置いて行使されるが、ただ対象を眠らせるだけが能ではない。惑わせること——『暗示』こそが本質だ。

意識を朦朧とさせ、判断を鈍らせ、望む行為を遂行させる。——その操り人形の強制が根底にある。

そして技の隠密性。エスパータイプやゴーストタイプは、特異な音を発生させるなどの前兆なく行使できる。幼い風貌を活かして近付いて来たサイキツカーとそのポケモ

ンの零距離のさいみんじゅつから逃れるのは、多くの者にとって至難の業だった。

そんなこととは露知らず、クリアが腕時計に視線を落とせば、3時に届こうかという時間。

「?、昨日の夕方からの記憶がねえ?」

軽く青褪^{あおざ}めながら、ポツリと呟く。

農園は年中無休で運営される。以前も述べたように、クリアが不在の場合でも問題なく経営される。とは言え、それが『クリアが仕事をしなくて良い理由』に繋がる訳ではない。

組織のトップが従業員に通すべき筋を示さないというのは、その下で副農場長として働くケーシーからすれば見逃せない事柄だ。クリア自身、看過できるものではない。

彼等の間柄が対等であることを考えれば、至らぬ点があれば互いに叱責が飛ぶのは無理からぬこと。その至らぬさの大小により叱責の大小が変わるのは当然で、今回のことはクリアにとって相応に大きな仕出かしと捉えていた。

ちょうど『サラリーマンが大事な会議を寝坊してすっぱかした時の心情』と言えば想像しやすいだろうか。クリアは血の気が引くような感覚を覚えていた。

「とりあえず、帰ろう。うん、知らん内に仕事ほっぽり出しちまつたけど?。?、?はあ、やべえ?。ケーシー怒ってねえかな? ??いや、怒ってるよなあ?」

???

??はあ、

相当堪こたえたように溜め息を吐いて、クリアは作業着をごそごとと漁る。

どうやらサイキツカーは外部との連絡手段を取り上げなかったようで、クリアはいつも通りズボンの右ポケットに入っていたスマホを慣れた手付きで取り出した。

だが如何せん、気が重い。スマホ自体も重みを増したように思えてしまう。ホームボタンを押しても画面が付かないのは、思いの外、ケーシイに怒られることを恐れているからか。

「ん？」

いや、そんなことはない。

陽の光の強さを疑い、左手で影を作つて覗き込むも画面は暗いまま。しつかりホームボタンを押したにも関わらず、純粹に反応していなかった。

数秒黙りこくつて考え込んだ後、彼は得心したように頬を掻いた。

「もしかして、充電切れか」

幾ら「テレパシーへの自動防衛状態」から目が覚めたとは言え、まだ完全に覚醒仕切つてはいないらしい。

『電源そのものが落ちている』という当たり前に思い当たりそうな候補に至ることなく、彼はメタモンに対して口を開いた――

「??じゃあねえ、メタモン、へんし――」

——が、ふと、冷静な部分が声を上げる。

『今、己がいるのはどこか？』と。

彼は変わらず橋の上に——その空中に、メタモンのへんしんによつて象られたリザードンの翼により飛んでいる。

普通であればメタモン一匹でリザードンの両翼にへんしんできそうなものであるが、彼等がイメージするのは『リーグチャンピオンの』という枕詞の付く飛び切り優秀なりザードン。

如何にクリアのメタモンが特異個体とは言え、——否、特異個体だからこそ、2匹はそれぞれ片翼にしかへんしんできなかつた。完全に能力をコピーするからこそ、2匹のメタモンには制限が付き纏う。

そのような状況下で1匹でもへんしんを解けばどうなるのか。火を見るよりも明らかだつた。

「——ッ!? メタモン！ へんしんを維持しろ！」

文字通り、片翼を挽がれる。

空に留まる能力を失つた時、自然、クリアは重力の鎖に縛られる。翼を持たない生物の宿命として、当然に大地に手を引かれる。

地上からの高さは目測20m以上。

模倣したレッドのリザードンの翼は、他個体と比較して非常に優れた性能を有している。喩え1度の羽撃きはばたきであつたとしても天を昇るくらい他愛もない。

その結果として高々と滞空するクリアの体。それが不意に世界の物理法則を思い出した時、どういう結末を辿るかなど分かり切つていた。襲い来る衝撃が、一端の人間である彼に決して耐えられる代物でないことは明白だつた。

クリアは慌てて命令を取り下げた。

普段の癖とは怖いもので、殆ど反射的に、無意識に完遂してしまう。今回は何とか、間一髪で窮地を脱したものの、小型充電器（高性能太陽光パネル）にへんしんしてもらう代わりに自らの命を投げ出すところであつた。

「あつぷな?、マジで危なかつたあ?!?!」

只管ひたすら『危ない』を連呼しながら、急に吹き出してきた冷や汗を腕で拭う。一気に冷水を浴びせられたかのように鮮明になる意識が、『トマトケチャップの添えられた新鮮な挽肉』を明瞭にクリアに想起させていた。

彼は股間が縮み上がるのを感じながら、早まつた動悸を何とか押さえ、幾分まともになつた頭でやつと考え至つた電源ボタンに指を這わせた。

「ふう?。よかつた、充電切れじゃなかつた?」

数秒程ボタンを押さえたところで、ホーム画面が表示される。背景には、農園の看板

を背にしてポケモンたちと撮った集合写真。新しい従業員が入る度に撮影しているため、その中には暑苦しくポージングをキメるマツシブーンの様も見受けられた。

クリアは農園に電話を掛けるため、*「受話器アイコン」*に指を重ねた。重ねようとして――

『クリア――!!どこ――』

「うおおっ?!?!??」――あ、

――突如スマホから響いた大音量に、驚きツルリと手を滑らせた。支えを失ったクリアのスマホが紐なしバンジーを敢行する。

あまりに突然。その突然が過ぎて彼は手を伸ばすことすら出来なかった。

視線が落下物を追う。生物の本能として、認識するよりも先に情報を求めて視覚が機能する。

時間にして数秒も経っていないだろう。ヒューツと落ちて行くスマホを見送る眼差しが、現実を直視して色褪せる。

そして、カンツと、鉄骨に激突した音が聴こえた気がして、

「――ああつ、あああああつ?!?!」

悲しい咆哮だけが響き渡る。?!?!」

スマホは物の見事に木っ端微塵に粉碎された。

あまりに無慈悲。この世に残滓すら残さぬように、破片は風に流れて海の方へと消えていく。

「俺の?!、スマホお?!」

古い型とは言え、長い間使っていただけに愛着も相当だった。それが目の前で砕け散ったことの衝撃は計り知れない。

しかし、不幸は連鎖する。

「うぐっ?!?!」

遠方から空間が揺らぐような波が勢い良く伝達する。

微かに聞こえた音。それは彼への指向性と害意を併せ持つ。

上下が逆転したような錯覚。醜く歪んだ視界に、酔ったような気分の悪さ。メタモンのへんしんが僅かに崩れ、大気を捉えていた翼に穴が空いた。

「!?! 不味いつ?!」

天を向いていた体が地上に引かれて傾いていく。

熱されたチョコレートのように溶けていくメタモンが、クリアの肩にへばりつく。自身も覚えた感覚と同様に、メタモンもぐるりと目を回していた。

「メタモン！ メタモンツ、大丈夫か?!」

クリアの呼び掛けには応え（こた）ない。しかし、応（お）じるように口元が微かに動いていた。

完全に気を失っている様子ではない。直ぐに立て直すのは難しそうだが、明確な反応を示さないだけでクリアの声は届いているようだった。

「くそっ?!」 メタモン、何でもいい！ 今できる範囲で、できるだけ柔らかいものに、衝撃を往（い）なせそうなものにへんしんしてくれ！」

肩に寄りかかった2匹のメタモンは、普段の速度からは数段落ちるへんしんで思い思いに姿を変える。

2匹に馴染み深いのは、やはり農園にいるポケモンたち。その中でもピンつと思いつくのがデンリリュウだった。ただ、進化したため毛量が大分少なくなった今のデンリリュウの姿ではない。メタモンたちが思い起こしたのは、デンリリュウになる前、クリアが幼い時の姿——ふわふわのメリープだった。

付き合いが長いだけに、メリープだった頃の姿は鮮明に覚えている。あの綿毛の塊だった丸い輪郭は、クリアのお気に入りだった。冬場や春先の寒い時期はメリープに包まれて寝入ったことも数知れない。その当時からクリアのアクセサリーとして肌身離れず一緒にいたメタモンは、外見のみならずその肌触りまで覚えていた。

記憶の正確さは、メタモンのへんしんに多大に貢献する。

クリアの肩口からモコモコと羊毛が膨らんでいく。それは人体の重要器官——頭部を中心に辛うじて足先まで包んでいく。嘗てのメリューの等身大を再現するのではなく、クツションだけにへんしんの対象を絞ることで、クリアの要求に十二分に応えていた。

不安を掻き立てる風切り音。

視界全てが白い毛で覆われたため、外の様子は窺い知れない。けれど最低限、頭だけは守るようにクリアは身を抱えて背を丸めた。

そして次の瞬間。

「イ、ッ?!」

地上に激突した衝撃が、左腕から体の末端まで電流の如く伝播する。運良く路肩に落ちたものの、その代償は決して小さくない。

幾らか衝撃が吸収されたとは言え、鈍い音がして左腕の感覚がなくなつた。代わりに激流のように纏わり付く熱があり、口の中を切つたのか、鉄臭い味が広がっていた。

左右の耳も聞こえ辛い。頭の中でガンガンと鐘が打ち鳴らされ、加えて、キーンと振動する音叉が耳に突き付けられたかのようにもあつた。

「あ、ああ?!、く?!そ?!。?!メタ?!モン、腕に?!もど?!れ?!」

ゆつくりと立ち上がるクリアの傍を、何台もの車が通り過ぎていく。その音が聞こえ

ない。直ぐ傍を吹く風すら、急激に肌が鈍ったかのようにして感じられなかった。

メタモンが羊毛状態から粘土もど擬きとなつて、またクリアの右腕で2本のラバーバンドとなる。酔つたような感覚はアスファルトに激突した衝撃で抜け切つたようで、ラバーバンドへのへんしんはいつもの速度で行われていた。

——大怪我だよ、クソが??。

クリアは路肩の整備用通路に移動して、痛みを耐えるように鉄骨にもた凭れ掛かる。内心で吐き捨てるが、純粹に思い通りに体が動かないことへの悪態だった。

——クソっ??、さっきの変な感覚はなんだ??。

肉体を取り巻く倦怠感の中、彼は冷静に思考を回す。

彼の身に襲い掛かつた天地逆転する奇妙な錯覚は、自然に生じたものではない。車の走行音に紛れた『指向性のある音』を聞き間違えていないのなら、それは作為的な代物であることの裏付けだった。

あのような不可思議を実現するのは、往々にしてポケモンだ。

彼は荒く息を吐きながら、落ちてきた先、『何か』が飛んできた先に目を向けた。

——何もないねえ??、いや???

人、がいる???

通路の先に人影があつた。橋の整備員かと思つてみたが、見るからに背丈が低い。ヘルメットを被っている様子もない。明らかにその場に相応しくない格好だ。

その人影は腰に手を忍ばせると、クリアに向かつて赤い玉を投げて来た。

——なん、だ???

その玉は空中で不自然に制動すると、ぱかりと口を開く。

そして——

「モンスター??ボール??——っ!?!」

そこからボールの勢いそのままに、ムシャーナが飛び出してきた。

それを後追いする形で命令が飛ぶ。

「ムシャーナ! サイコキネシス! その男を捕らえろ!」

「チツ、メタモン??! へんし——ゲホゲホツ! へんしん・外骨格：右腕部——ケーシイ

??!

ムシャーナに向けて翳かきされた、ケーシイを模したクリアの右腕。

続けて、

「外骨格：背部——オーロット??! 俺を??支えろっ??!

クリアの背面から木の枝が伸び、彼の体を支えるように鉄骨や通路の間に支柱を立てる。

突然だが、メタモンは擬態が得意だ。へんしん後の能力はへんしん元と遜色ない。

故に——

「サイコロ??キネシス?!」

——幾ら部分的なへんしんとは言え、へんしん元の技を使えない道理はない。

クリアのケーシイ化した右腕から、力強い不可視の波動が放たれる。それは空間を歪め、鉄骨を軋ませながら、ムシヤーナのサイコロキネシスを押し潰した。

マサラタウン：キメラ

「あんなの、メタモンの使い方じゃないだろう?!」

想定外のことに對する驚愕を抱きながら、サイキツカーの男は顔を顰めた。

——どこの世界に生身でポケモンの技を使うやつがいるツ!?

彼の苛立ち混じりの感想は、その光景を見た者ならその全てが思わず零す、あるいは吐き捨てるようなものだった。

一体どの世界にメタモンを己の身として、一心同体として扱う者がいるだろうか。それは決して比喩などではなく、真に『唯一』という表現が当て嵌る。世界広しと言えど、クリア程の精度で行える者など彼を除いて存在しないだろう。

抜きん出たバトルセンスを持つレッドでさえ、実現不可能。

職人の手掛ける飴細工のように自由自在に姿を変えさせるその技量は、クリアの幼馴染をして理解の匙を投げさせる。互いに互いの理解不能部分を内心で抱えながら、その中でもクリアの件は異色過ぎた。

仮に。仮に人の身でポケモンの技が使えたとして、

「なんでそこまで出力が出せるんだよ?!?!」

人とポケモン。その構造上の差異は然ることながら、耐久面においても言わずもがな。

単純に爪がある、牙がある、鱗がある——そういった外見上の違いから、固有の内臓器官を持つなど表面的に見えない違いまで、それぞれのポケモンが生き抜くために進化した証がある。淘汰されたポケモンにはない強みがあり、淘汰されたポケモンよりも優れた特徴がある。

それがあるからこそ、ポケモンは自らの技に、相手からの技に耐えることができる。

逆に、それが無いからこそ、人はモンスターボールを開発した。

その変え難い事実を覆す^{くつがえ}ように、サイキツカーに相對する男——クリアはポケモンの技を十分な効果をもって行使した。

それが『メタモンを纏っているから』と言われればそれまでだが、これまでそんな事例は見たこともなければ聞いたこともない。

「くそつ、ムシャーナ！ ひかりのかべ、リフレクター！ ネイティオ達が戻るまで持ち堪えろ！」

攻めに出たはずが、たった一手で打ち崩された。

サイキツカーの目から見て、クリアという名の青年に取り立てて変わったところが

あつた訳ではない。

農家らしい作業着の、日焼けた青年。

車内でのテレパシーの攻防を抜きにして見た時、サイキツカーの目に映る姿はそんなものだ。

誘拐前の町を歩く姿にも特別な雰囲気は感じられない。チャンピオンとしてのレツドのように畏怖すべき気配がなければ、グリーンのように人を惹き付けるものもない。ブルーのように侵し難いものもなく、ピカチュウを前にしたイエローのような危なさもない。

色のある幼馴染たちと比べれば平凡そのもの。

比較対象がそれぞれの色を持つが故の、相対的な無色。

それがおそらく、万人から見るとクリアという青年だ。

——クリア?、クリア?ライカー?!!　ほんと何だよこいつ!

悪態は、そのままサイキツカー側の状況の悪さを示していた。

外見的な優劣は、間違いなくサイキツカー側に傾いている。クリアは血を滲ませた擦り傷と打撲だらけで、その左腕は折れて力なく垂れ下がる。吐く息も痛みを耐えるように荒く、熱い。

加えて、その耳はまだまだ周囲を聞き取れない。遅々として外界の音を拾おうとしな

い。それは恰も、地上にいなながらクリアただ一人が水に押し込められたかのようで、満身創痍を絵に描いたような有様だ。

にも関わらず、

「サイコツ、キネシス?!」

技の威力は衰え知らず。

ケーシイ化した右腕は、当然ケーシイらしい黄色い毛皮に覆われている。それが静電気に当てられたように毛が逆立ち、あたかも巨大化した不可視の手と連動するかのよう

に、ぐぐつと力強く握られていく。

その動きに合わせて壁が軋む。
クリアとサイキッカーを隔てる、定まることなく7色に光る透明の壁。水面に垂らした油を思わせる色合いが、苦しげに歪んでいく。

「ガキんちよが??なんで、襲ってきた??!」

クリアに対する明確な害意が、彼に『抵抗』を選ばせた。

明らかな外傷者を前にした反応として、この現状を悪ふざけで笑って済ますことなどでははしない。サイキッカーの外見的な幼さからある程度の寛容さを備えていたクリアの心は、その範囲から逸脱したサイキッカーの行いに、早い話、キレていた。

突然落下させられ、重傷を負い、更にオヤジ狩り紛いの襲撃。

落下時の犯人が誰なのか、その正確なところは分からなかったが、状況的に少年が原因であろうことは明白だった。もし、少年ではなかったとしても、その関係者であることは間違いない。

ならば、少年にキツいお灸を据えることは合理的であると判断した。

「何でもかんでも??チャラになるって、思わん方がええぞ?!」

「ツ?!」

血混じりの唾を吐いて、青筋を浮かべたクリアが唸る。

白髪の間から少年を刺す琥珀色の眼差しが向けられ、思わずサイキツカーがたじろいだ。

「外骨格：頭部から臀部——デンリユウ?!」

クリアの命令で、オーロットにへんしんしていたメタモンが凄まじい勢いでクリアの頭部を覆い隠し、赤い宝玉・白の長毛を備えた黄色い龍の頭部を形作る。

それはまるで生物の腐敗の過程を逆送りで見るときのよう。

面長の頭龍骨が形成され、神経、肉、皮、体毛が纏われる。続けて頭部からクリアの背筋に沿って真新しい椎骨が伸び下りて、それは途中で尾椎として長い尾の基礎を象つた。そうして背骨は剥き出しのままに、尾骨が頭部同様に無数の紅玉と白長毛に覆われた。

多少のグロテスクさを残しながら、メタモンのへんしんが完了した。

「無力化?、させてもらうぞ」

デンリユウの頭部が人語を発する。

放電音を弾かせながら青白く発光する白い体毛。風に逆らうように大きく広がる。

紅玉から紅玉へ。時折凭れ掛かった鉄骨や整備用通路に小さな稲妻が走りながら、今にも爆発しそうな気配を漂わせて電撃がクリアの周囲を侵し始める。

——??くそおつ、何なんだよこいつ?!

目まぐるしく変化するクリアの姿に、サイキツカーの困惑は最高潮に達していた。

本間に同じ人間かと疑わしくなる程に——メタモンを介しているとは言え——好き勝手に自らの姿形を弄るクリアは、多くの人にとって理解し難いに違いない。

サイキツカーとて、『超能力』という一介の人間では持ち得ない特異能力を持つている。手持ちポケモンや無警戒な人間に対してのテレパシーは『超能力者』として当然にできるし、重量の軽いものを動かす念動力も使おうと思えば使える。

素のスペックとして、一般人よりも一段上にいると言っても過言ではない。

そんなサイキツカーからしても、クリアに得体の知れないものを感じていた。

——ッ、ネイティオとランクルスはまだ来ないのか?!

車外に投げ出され、そのまま風船のように吹き飛ばされたランクルスのため、彼はネ

イテイオをその回収に飛ばしていた。そのため、現在自由にできる手持ちはクリアに^{けしか}嗾けているムシャーナー1体のみ。

今回の作戦上——クリアに接触する関係上、相手の警戒心を煽りにくいポケモンを意図的に選出したとは言え、その実力は折り紙付き。クリアの拉致を完遂するため、搦手が得意であるのは勿論のこと、純粋な戦闘力でも優れた個体を選んでいた。

——ムシャーナだけじゃ押し切られる??!

それでも、クリアを相手するには力不足だった。

さいみんじゆつやあやしいひかり、かなしばりなど、放った^{そは}傍からサイコネシスに掻き消される。

それらはタイプ相性とでも言うべきか。それともサイコネシスの万能性と言うべきか。悉くが^{たたり}干渉され、散らされる。

バンの中で行われた精神下での闘いで済んでいれば、サイキツカーとしてはここまで苦しまされることはないはずだった。

だが知つての通り、結果は思い通りとはならなかった。

「でんげきは?!」

「くっ?!」

一瞬パリッと、壁まで細い線が到達したかと思うと、次の瞬間には強烈な閃光を伴っ

て破裂音が響き渡った。

それと同時に障壁が砕けた感覚。クリアとの間にあった衝撃を緩和する何かがなく
なり、ダイレクトに産毛が逆立つような悪寒に襲われて、

「あ、やばっ——」

サイキツカーの目の前に、光の奔流が迸った。

α? θ? ρ π α ρ? δ ε ι σ ο ☒ : とある報告書

◇ 保管分類 ◇

無期限（要保管書類）

◇ 閲覧可能範囲 ◇

Bクラス以上（部分制限）

◇ 対象 ◇

対象UB：UB02 EXPANSION

調査対象：カントー地方在住UB遭遇者A（仮称）

報告者：UBST | PSYB06

◇ 資料概要 ◇

資料1 UB02 EXPANSION

資料2 遭遇者A概要（部分制限：Aクラス以上）

——以下、閲覧制限Aクラス以上——

情報3 未確認UB

情報4 遭遇者Aの所持ポケモン

◇ 1.
調査概要 ◇

本書は、某月某日、某動画投稿サイトにてアップロードされた動画に端を発する、
U^{ウルトラビースト}B 及びUB遭遇者について報告するものである。

(中略：日程等記載)

.

以上のように、Aとの接触自体はスムーズに行えたものの、テレパシーによる意思疎
通段階で障害が生じた。

なお、テレパシーに関する閲覧者の共通認識として、3点――

① 隠密性・機密性が高い。

② 対象者の言語化不可部分・忘却部分の情報についても取得可能であり、情報精度が高い。

③ 対象からの抵抗確率が低く、ポケモンを介した場合、その確率は限りなく0%に近づく。

——ということに留意いただき、本調査における手法として、決して確実性の低いものを選択した訳ではないことをご理解いただきたい。

そのため、本調査期間中に得られたAの身辺情報の大半がテレパシーによるものであり、その有効性は示されたものと考ええる。

しかし、当のAの精神構造の異常性から、直接の情報取得を断念。実力行使による捕縛を試みるも、Aの特殊技巧「——制限区間開始——、後述の未確認UB、並びに未確認UBを封殺したケーシイの出現——制限区間終了——」により、調査の続行が極めて困難と判断し、同様に断念することとなった。

「——制限区間開始——」

対象UBの情報は取得できなかったものの、未確認UBとケーシイとの戦闘により、未確認UBの情報については動画データと共に保存した。

しかしながら、他UBと同様、出現時にU^{ウルトラホール}Hを通過するためか、未現物質の影響によ

る映像の乱れが生じている。

◇ 2. 未確認UB ◇

黒い水晶のような二腕二脚から成る。頭部と思しき箇所には3本の角が縦列し、二腕の先には3本の鉤爪、二足にも同様に鋭角な爪が備わっている。

無機的な外見に見合った硬度を有していると推測される。

頭部には2つの視覚部があり、挙動から人間と同様の機能を有していると考えられるが、視覚外からの攻撃にも対応したことから、何らかの受容器官を所持している可能性が示唆された。

声帯の有無は不明。

(中略：その他特徴等)

.

当該未確認UBは、その規定に基づき、整理番号『UB X X』^{ナンバーレス}に置き、外見的特徴か

から情状酌量の余地があると判断して「Bクラス維持」とする。

「——制限区間開始——」

なお、本調査に同伴した2名のCクラス職員を含めて当該調査に関する記憶の消去・改竄かいざんを実行する。消去記憶についてはテレパシーでの復元が不可能なため、一連の整合性に細心の注意を払うこと。

また、本機関が遭遇者Aを知るに至った経緯を十分に理解し、第三者によるSNS等へのUB情報流出の可能性に留意して職務に当たること。

追って指示を出す、情報班は一般Web下でのUB関連データの削除を引き続き行うこととし、Aに対する調査は、Aクラス職員以上で引き継ぐこととする。

「——制限区間終了——」

以上。

マサラタウン：分岐点

それは、偶然が重なり合つてできた一つの不幸なのだろう。

防戦一方だったとは言え、ムシャーナの技は確かにクリアの技に拮抗していた。喩えそれが、司令塔たるサイキッカーを守るための偶発的な火事場の馬鹿力だったとして、クリアのサイコキネシスに——そのオリジナルとなったケーシーのサイコキネシスに、耐え得る壁を張るといふ覆しようのない事実を残していた。

対するケーシーと共に成長したクリアという存在。

人にして人ならざる感覚を後天的に獲得した青年は、メタモンという出力機を備えることで、ポケモンと同等に、しかし人としての離れ業を行使するまでに至っていた。

その技量はケーシーの技をも自在に操る。更に威力調整も可能であり、サイコキネシスに耐えた壁を砕く出力を、瞬間的ながらも放出した。

そして多くの車が行き交う大橋。膨大な電力が消費され、人が血液のように絶えず流れ、運動エネルギーが無限に消費される。

おまけに橋下では海流が巡り、波が立つ。

それがそこに顕れたのは、そうしたエネルギーの消費が閾値を超えたからなのか。曲がりなりにも状況を理解できたのは、サイキッカーの男、ただ一人だけだった。

◇ 「う、ぐう。」

全身に纏わり付く嫌な痺れ。倦怠感とも付かない感覚に囚われて、サイキッカーは堅く冷たい通路に頬を打ち付けた。

脳からの命令に反し、急速に五体を支える力は喪失した。

それがでんげきは起因する神経交錯だと、鈍い痛みが頭蓋に反響する中、彼は正常に判断していた。

彼は——彼のみならず機関に所属するサイキッカー等は、痛みに対して慣れていて、痛みによる思考の停止が、任務の失敗に高い確率で繋がるからこそ、訓練により敢えてその感覚を鈍化させている。四肢の欠損などの大きな傷を除き、思考の揺らぎはそれほど生じない。そういう風に、彼らの精神は作り替えられている。

彼は先の興奮を落ち着かせ、冷静に頭を回しながら、正確な状況把握に努めていた。

——一瞬だけ??意識が飛んでた。それと??、??あ、やっぱりダメだ。痺れは良いとして、体を操作できない。??これは麻痺だけじゃない??、神経伝達系が一時的にバグってる気がする??。??くそつ、これだからでんきタイプは嫌いなんだよ??、ポケモン

相手でさえ必中の技を人間が避けられる訳がないだろ?!

内心で舌打ちし、しかし事象の前後関係を理解して、彼の意識は外部へと広がって行く。

常人であれば『四肢が突然命令を受け付けなくなる感覚』に取り乱し兼ねないものを、彼は客観的に認識することで着実に周囲の把握を固めていく。

閉じられていた瞼を開き、黒い瞳がクリアを追つてのろのろと動いた。

——満身創痍は依然変わらず、か。

クリアの体勢は無防備だ。

メガデンリユウの骨格が解れ、代わりにオーロットの枯れ木が再びその体を支えている。

一応の警戒——ケーシィ化した腕による継続的なサイコキネシスをムシャーナに向けるものの、サイキツカーの無力化を確認して安堵の息を吐いている。その『安堵』の中にはきつと、手加減が上手くいったことへの『緊張の緩み』もあるのだろう。

クリアが放つたでんげきは。

それは間髪入れずに2発放たれていた。

初撃こそひかりのかべとリフレクター——2種の壁を瞬間的に突破する威力を持つものの、打ち破ることのみに注力した調整故に、壁の消失と共に失せていた。

そのための、2段構え。

強烈な光が明滅する中、二の矢で飛んだでんげきは。サイキツカーの自由を奪うだけの大分威力の抑えられた閃光は、それでも必中の性質は揺るぎない。サイキツカーに回避行動に移る猶予を渡さずに、今の結果を齎していた。

そんな当のクリアは、鉄骨に凭れながら深く溜め息を吐いていた。

——うん、暫く動く様子はなさそう。だけど、こちらが動けない以上、状況は変じようがない、かな？ ネイティオたちが戻ってくれば話は別だけど、ランクルスが飛ばされやすいから今すぐとはいかないだろうね??。

内心で、任務に連れ出すポケモンの選定基準の見直しを検討するサイキツカーは、しかし、常の任務であれば、このような思考は持ち合わせていない。

敵の前に転がれば、その先にあるのは直近の死か、情報を吐かされてからの死か。いずれにしても、死あるのみ。

任務達成に向けて、そして生への執着のみが思考を占める。

だが、現在相対しているのは、その心配のない者。

クリアは紛うことなき一般人。能力的には『一般人』から逸脱しているが、その常識は十分に『一般人』の範疇に収まっている。徒に他者を害することはないし、手ずから相手の命を奪ってやろうという倫理破綻もない。

寧ろ、そういうことを忌避する質たちなのだろう、とサイキツカーは判断していた。

あれだけの害意を示しながらも、サイキツカーを大した傷もなく無力化するだけに治めたことがその証拠と言つていい。外見的な幼さを差し引いても、傷が残るような手荒な真似をクリアは取らなかつた。技を放つムシャーナに対しても、サイコキネシスによる拘束に留めていることから、その予測はほぼ間違いないだろう。

無論、明らかに手加減されたと分かる仕打ちであつたから、そこに多少の苛立ちを感じなかつたと言えば嘘になる。

だが、任務の継続可能状態を維持できていると思えば、何の問題もなかつた。

——身辺調査の段階では『地方で成功している一般人』程度の認識だつたのに、とんだ貧乏くじを引かされた気分だよ??まったく??。

十把一絡げの『一般人』。

これまでクリアに対するサイキツカーの認識はそうであつたし、恐らく今を知らない者にとつても、今後その認識は変わらない。特殊な一面を知らなければ、『手広く事業を進める若き事業主』程度にしか思わなかつただろう。

農業に意欲がなければ、ポケモンの世話に関心がなければ、カレー作りに興味がなければ、それこそ一生関わることはない者もいるかもしれない。言わずもがな、サイキツカーのように裏世界にいる者とも。

互いに一生交わることもない世界にいる住民が、表裏問わずかなりの数がいるだろう。路傍の石として見向きもしない存在が数多いだろう。

それがこれまでの普通だったし、UBに出会わなければ、きっと今後も同様の関係性が続いただろう。

だが、どんな運命の悪戯か、UBがクリアの元に行き着き、その存在を機関により確認された今、こうして交差する筈のなかった者同士が顔を向き合わせている。

「ふう、きつつつ?」

体中が意識を朦朧とさせる程の熱を持っている。

己の体調が刻一刻と悪化していることを自覚するクリアも、UBき02 EXPANんSIONくをきっかけとした非日常への幕開けには気付いていない。

社会人として持つべき体調管理能力も、所詮はクリアの中だけに完結した『変化や違和を覚える感覚』に過ぎない。外部で生じた変化を、密やかに動く大きなうねりの中に引き摺り込まれたことを、実感できていない。

それに彼は、どれほど特異な能力を持つとうと根は一般人。安否確認等の優先順位の高さで言えば、やはり自身のことが一番に来る。彼は体調の再確認を行っていた。

「つたく、骨折とか何時いぶりだよ?。ツイてねえ?」

寧ろ、あれだけの高度から落下しておきながら、大きな外傷が骨折のみで収まったことは、運が良い方——ツイていることだろう。だが、左腕を中心に血液が熱湯に成り代わったような錯覚、そして自由に動かせないことがもどかしく、思わず愚痴を零していた。

そんな悪態を吐く最中にも、脈動に合わせて痛い程の圧力が皮膚の下を容赦なく走る。心臓から送り出されるそれも傷を広げるような勢いを感じさせていた。喉奥を圧迫するような、心臓が飛び出てきそうな感覚。吐き気とは違う熱の込み上げる感覚が、静かにクリアを襲っていた。

「??あー、ほんまキツイ。??が、さて——」

——ガキンちよを無力化したとはいえ、どうやって警察に突き出してやろうか。意識を切り替え、サイキッカーに視線を向けて思案する。

——こつ酷く叱って貰わんとこつちの気が済まないんだが、そのお世話になるお巡りさんを呼ぶにも連絡手段がなあ。

軽く考えて、はたと気付く。

——てか、メタモンに携帯にへんしんして貰えば万事解決だな。

そして恐らくここが分岐点。

空白の日記が続くことの原因であり、本来想定されていた世界のシナリオからの乖離

だ
っ
た。

マサラタウン：りゅうせいぐん

変化は、些細なことだった。

『空間が、歪み落ちる』。

突如中空に現れた黒点に、空が吸い込まれるようにして捻じ曲がる。

殊更論ずるまでもなく、異常であった。異常であったが、しかし、『些細』の一言で済ませられる。

自然法則に則るならまず有り得ない現象は、逆説的にポケモンの仕業であろうと推測できる。摩訶不思議な生物が存在するこの世界だからこそ、半ば確定的に何某かの影響であろうと予想できる。——ある種原因が明確であるからこそ、そこに住む人々の思考は制限される。

現にクリアの反応は多少訝しむだけに留まったし、直ぐに興味は薄れてその視線をメタモン^スマ^マホ^ホに落とした。

特段可笑しいところは存在せず、だから彼のみならず多くにとって、それは不意打ち以外の何物でもなかった。

視界の隅で、閃く。

日中であるにも関わらず、燦然とした眩い閃光。

鏡に陽光が反射したような鋭い光が、膨大な熱量を持つて振り抜かれた。

「……………は……………」

重力に引かれて倒れゆく。

一瞬の浮遊感の後、足元から落下する。

両足に違和感。喪失感。

——体を覆う、倦怠感を倍する壮絶な熱さ。

スマホがカラカラと投げ出され、強かに体を打ち付ける。サイコキネシス代わりにム

シャーナを絡めとっていたオーロツト^枝が、千切れ飛ぶように焼け落ちた。

「何……………が……………」

ミキサーの中に投げ込まれたような、上も下も分からなくなるような急転直下の状況変化に、クリアの理解が追いついて来ない。

そしてその曖昧な認識のまま、彼の意識は暗く閉じた。

◇

その感情に名前を付けるなら、『怒り』だった。

大橋上空に姿を現した黄色い影。

海の藻屑と消えた。1. 台目の電波を元に、ロトムの逆探知によりクリアの居場所を特定したケーシイは、空間テレポルト転移して早々にその現場を目撃した。

その惨状は、彼を怒いからせるに十分だった。

そしてそれは、『憤怒』と言って余りある感情だった。

????????????????
 ^^^^
 ?
 !!!!!

物理的に空間を捻じ曲げる。

クリアの行使したサイコネシスの比ではない、真に超常的な圧力。

『飴細工』などという表現すら生温い容易さで、大橋の一角を巻き込んで空間が収束する。

ジオラマを徒に壊すように、しかし徹底的に磨り潰すように、アスファルトが粉微塵に砕け散り、鉄骨が飛沫を思わせて弾け飛ぶ。

半透明の膜に覆われた数多の車種——理性の残るケーシイにより、バリアでガチャ玉のように隔離されたその車窓から覗く異空間に、全ての者が夢であることを疑った。

もしかするとクリア以上に状況を飲み込めない観測者が、それでも冷静なまでに、その光景に『容赦』というものを見出せなかった。

ひと目で分かる、理を外れた能力。

何に対して行使された力なのか。そうしたことに多少慣れた、偶然バスに乗り合わせ

た極一部のエリートトレーナー等が思考し、——そう思考したことを自覚する前に、事態は動く。

徐おもむろに動かされる黄土の細腕。

余裕を持った一拍の後、ケーシイの眼前で光が弾けた。

それはクリアの両足を両断するに至った狂熱で、再起する光景に、頭の奥深くで更なる熱が込み上げる。

——何であれ、逸脱した存在のその心の在り方、あるいは感情の揺らぎは、大きくエネルギーに変換される。

内面的な突沸は、わだかま蟠ることなく波動として世界を揺るがした。

《——散レ——!!!》

轟ツ、と。

大海が割れる。巨大な球体を落としたかのように、海原うなぼらが綺麗な球状を象かたどっている。

そこに物理的な圧力があるのは明白で、押し固められた海水に、ポケモンではない唯の魚類がその身を赤く爆ぜさせている。ランターンやパルシェン等の耐久力のある海棲かいせいポケモンでさえ、提灯の圧壊や外殻の破損等、少なくともダメージを負っていた。

並のポケモンにとっては酷な環境にありながら、しかしその最中にて。

《——不快……》

異次元からの来訪者が顔を覗かせていた。

その身に罅ひびはなく、傷もなく、ただ陽光を反射する固体があつた。

眉根を寄せたケーシイの糸目が、地上の物質で言えば『黒水晶』によく似た何かを睥睥していた。

それは何かしらの心情を表す音を発する。恐らく、広義で『声』と呼んで差し支えな

そんな声に従属するように、数多の恒星が瞬いた。

光は、およそ毎秒30万kmで宙を駆る。

真空中と大気中とで速度に若干の違いはあるものの、その差は僅か0.03%に過ぎ

ない。(※)

故に、『瞬き』を認識した時には、既にそれは対象物に到達している。如何にポケモン
 と言えど、純粹に光速を認識することは——観測することは、不可能に近い。

摂氏数千°Cの暴力を孕んだ光線は、真に『はかいこうせん』と呼べる代物だった。

視界を焼く強烈な白。

空を焦がす激烈な白。

『光』が想起させるものとは対照的な、悪魔的な白。

それに相對しておきながら、

《《 微温ヌルいナ 》》

彼は微動だにしなかった。

励起し、仄かに明るい黄土の体毛が、総毛立つ。

何某かの攻勢に移る前兆であることは間違いない。

とはいえ、それに続くアクションは皆無だった。

腕を振るう？ —— 否。

開眼する？ —— 否。

障壁を解除する？ —— 否。

全く以て本当に、それらしい素振りを一つとして見せていない。

果たしてそれは、事実だったのか。

続く異常に、あまね遍く全ての者が『そんなはずはない』と断言した。

海水面が上昇する。

続けて隆起する大地。

海底から分厚い潮の層を突き破って、鋭い岩肌が頭になる。

それは峻険なる溪谷。

或いは、がが峨峨たる剣山。

陽を孕む雫を散りばめて、星そのものが牙を剥く。相反するように、空が落ちる。

世間一般に『流星』と呼ぶそれは、群れることで『星雨』と名を変える。

或いは、『伝説』を冠するポケモンが操るりゅうせいぐんとも言えるだろう。殺到する数多の星屑。

——赤熱した天の涙が、無数の母なる剣戟と鏡合わせのように降り頻る。

障壁越しにさえ、肌を波立たせる振動。

想像を絶する音が響きながら、正常に音を『音』として認識する機能が欠落する。人々は余りの轟音に無音を錯覚する程だった。

そして。

ケーシィに到達した熱線は、悉くがその手中に収められる。

この場にレッドがいれば既視感に見舞われるであろう光景は、最強の一角——リザードンのブラストバーンへの対処の焼き増しで。

《——朽チテ、詫びロ》

硬質な黒が自壊する。

力任せに水晶を砕いたような荒々しきで、同時に砂に還るような柔らかきで、その肢体が崩れ落ちる。

?????
掠れた小さな響き。

見下ろすケーシイのその先で、異次元からの来訪者が深い闇に飲み込まれる。表情らしい表情のないその存在が、しかし明確に、苦く敗北を認めたように音を響かす。

この僅かな時間の邂逅で、この場における二者の勝敗は決していた。

日記：お見舞い

△月○日

気が付くとタマムシ総合病院のベッドの上だった。

『な、何を言ってるか分からねーと思うが、オレも何をされたのか分からなかった——!!』というような具合に、全身を強打しながら悪ガキを成敗したところまでは覚えているものの、そこから先は全く記憶がなかった。

何か途轍もないことが起こったような気がするが、本当に純粹な「気の所為」かもしれない。とはいえ、メタモンが形も変えられないほど草臥れていることから、「相当のこ」とが生じたのはほぼ間違いないだろう。

しかも看護師さんが言うには、おれは一週間程度意識不明であったようだ。

メタモンも心配させたことだろうし、マサラタウンに戻ったら目一杯労うこととしよう。

今は傷を治すことに専念しないとな。

△月△日

レッドが見舞いにきてくれた。

一般的な幼馴染の対応としては普通ではあるが、世間的に見れば「現チャンピオンの唐突な訪問」である。病院全体が浮き足立っていたような気がするし、子ども達は疎か大人でさえ興奮している様子が感じられた。

おれ自身は病室から一步も出られなかつたから雰囲気を感じただけだが、それでもおれの病室の前が俄にざわめき立ってレッドが姿を現しては、察するほかなかつた。

そんなおれの気持ちなど露知らず、「よっ」と軽い挨拶と共に入室したレッドは、タマムシデパートで買ったと思しきフルーツの盛り合わせを持ってきてくれていた。

その何等物怖じしないところはレッドらしい。

「レッドに林檎を切り分けられる」という（おれにとっては）特に何ともないイベントが展開されながら、一頻り世間話に勤しんだ。

どうやらケーシーからおれが病院に運ばれた経緯を聞いていたらしく、珍しく「大丈夫そうか？」や「無茶するなよ」などと優しい言葉が投げ掛けられた。

当のおれの症状としては、両足が切断されていたみたいで、それをメタモンがへんしんで繋いでくれたとのこと。

包帯ぐるぐる巻きの全身に、両足・左腕はギプスで固定。「絶対安静」という満身創痍具合でほとんど体を動かせない状況であるから、身体のあれこれを知れたのは僥倖と言つていい。

そんな感じに、主におれの容態が教えられて、レッドによるお見舞いはお開きとなつた。

レッドは帰り際に、「いやしのはどうでも使えればもう少し早く治るかもな」なんてことを言い残して、病室を去つていった。

ゼルネアスあたりならそういう技も使えそうな気がするが、あまり人前に姿を現したがるような性格ではない。入院している間は自分の治癒力だけが頼りだろう――

(みみずがのたくつたような線が続いている)

△月???日

朝起きたら食べ掛けの林檎が萎びていた。

そして日記に子どもの落書きのような線が引かれていた。

数日前に目を覚ましてからというもの、頻繁に睡魔に襲われる。

体はまだまだ休息を欲しているのだろう。

仕事もあるから早く治さなければ、と思うものの、当分は病院のお世話になりそうだ。

△月□日

寝る時間が不規則になれば、起きる時間も当然の如く不規則となる。

深夜。静まり返った時間にすつと目が覚め、布団の上で蕩ける2匹のメタモンを撫でていると、不意にカーテン越しの窓が淡く光った。

月明かりの青白さではなく、緑掛かった光。

非常灯の色合いのようなある種の不気味さで、正直、背筋が強ばった。が、その強ばりがボロボロの体に痛みとなって現れて、早々に意識は痛みを耐える方に割かれていった。

△月◇日

この病室には出るらしい。言わずもがな、「幽霊」である。

おれのいるところは重傷度の高い患者向けの個室であるから、過去、命を落とした患者がいるとかいないとか。

そんな話を現患者にするなよ、と噂好きな看護師に思いながら、夜はぐつすりと就寝した。

日記：ポケモンのちからってすげー！

△月●日

今日はブルーが見舞いに来てくれた。

病院の反応としては案の定であったが、ブルーもブルーで颯爽と病室に入ってきた。

ただレッドと違ったのは、入って早々全身包帯だらけのおれを見て一瞬だけ足を止めたところだろうか。レッドは「傷なんか唾付けとけば治る」くらいの精神であるから、きつとブルーの反応が普通なのだろう。

ブルーと言えば、テレビや雑誌の取材に引つ張りだこで、最近ではドラマの主演にも抜擢されているらしい。イエロー曰く、超が付く程に多忙であるとか。

いくらドラマの舞台が丁度カントーであるからといって、そう簡単に来れるとは思えないのだが、態々時間を見繕って見舞いに来てくれたことには感謝しかなかった。

そんなブルーであるが、レッド同様に手土産を持ってきてくれた。が、フルーツの盛り合わせの代わりとしては些か贅沢であった。

ブルーの手持ちの一匹——サーナイト。

幼馴染のポケモンであるからピンと来たが、レッドが帰り際に言っていたいやしのはどうも使えるポケモンで、恐らくレッドからブルーに声を掛けてくれたのだと思う。

餅は餅屋——今回のケースで言えば、怪我は病院に、というのが世間的な認識ではあるが、ブルーのサーナイトに関しては少々事情が異なる。

医療^{ポケモン版の医師免許}ポケモン免許を取得しているから、人体等に対しての技の行使が認められていて、更に幼い頃からの経験やきのみ等々で特攻が尖っているから、特にいやしのはどう使いの中では世界の十指に入ると言われていたはず。

正規の手続きを経て施術を受けようとするとべらぼうに高い金額となるが、今回については『日頃の感謝』ということでも上手く丸め込まれてしまった。

これまで仕送りしていたきのみの恩返しにしては貰い過ぎな気がするから、これからは $\pm\alpha$ を付けた仕送りですでどうか自分の中で折り合いを付けようと思う。自社のきのみジュースとか製品とか、いろいろ。

……正直、難しそうな気がするなあ。

△月??日

人の手による手術もすごいが、未だ詳細が分かかっていない正に『超常現象』と言えるポケモンの技も、体感してみると「すごい」としか言いようがなかった。

とはいえ、要素を分解して突き詰めると、サーナイトが頗る優秀であったわけだが。病院の『予後観察』と言えば良いのか、正確な表現は医学を齧っていないから分からないが、術後の治癒促進として、ラッキーからいやしのはどうは受けていた。怪我の種類によつてはポケモンによるアフターケアは一般的であるし、今回のような大きな怪我では当然のように受けられるものとなっている。

その効果としては「ちよつとずつ治つている気がする」程度であるから、劇的な効果を実感するものではなかったが。

それが昨日、サーナイトのいやしのはどうを受け、一晩寝てみれば体の痛みは綺麗さっぱりなくなつていた。肌の引き攣り等の違和感も、切断されたらしい足を除いて少しも感じなくなつていた。

『十指に入る』という実力について信じていないわけではなかったが、それでも本当に伊達ではなかったらしい。

前々から分かつていたが、改めて思った。

ポケモンのちからつてすげー！

(あまりの力の入り具合に、文字に躍動感が生じている。)